
言霊師

28号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

言霊師

【Nコード】

N7219S

【作者名】

28号

【あらすじ】

『言霊師』

それは全ての言葉とそれを紡ぐ声を扱う者。

人の言葉も、人ならざる言葉も、扱うことが出来る者。

それ故彼らは人を捨てた。

時は暁の世。

場所東の都。

ここで始まるは1人の男の物語。

人でもなく。物の怪でもなく。鬼でもない。

消えずに残った、たった1人の言霊師の物語。

序章の巻

『言霊師』

それは全ての言葉とそれを紡ぐ声を扱う者。

人の言葉も、人ならざる言葉も、扱うことが出来る者。

それ故彼らは人を捨てた。

物の怪をその眼に宿し、鬼をその身に抱き、太刀をもしのぐ言葉の刃をその体に携える。

しかし、時代はあまりにも早く過ぎた。

物の怪は人と交わり、鬼は邪心を捨て去った。

人でもなく。物の怪でもなく。鬼でもない言霊師。

彼らは時代に負け、いつの間にやら姿を消した。

時は暁の世。

場所は東の都。

ここで始まるは1人の男の物語。

人でもなく。物の怪でもなく。鬼でもない。

消えずに残った、たった1人の言霊師の物語。

其の壱

何とも頼りない煙を吐き出して、鬼人九狼^{きじんくろう}はキセルで灰皿をコンと叩いた。

不思議な男であつた。

女が放っておかないような整った顔立ちは二十九歳という彼の年齢にそぐわぬのに、鋭い眼光と漆黒の髪と彼を待とう雰囲気は、四十を越えた男の貫禄を醸し出している。

外見よりずっと長い時を生きているようでいて、それでもキセルをボンヤリと眺める表情は少し子供じみていて……。無理に一言で彼を表すならば『とらえ所のない男』、と言えるのだが、それでは少し物足りない『何か』がある男であつた。

鬼人は今、こぢんまりとした喫茶店の一番奥のカウンターにいる。そこが彼の指定席であり、仕事場であつた。

鬼人の仕事は『言霊師』。人やそれ以外の物の言葉を呼び集めたり、それを具現化すると言う物である。しかし言霊師なんて職業を、この暁の世で覚えている者はいないだろう。

何せ数百年前、まだこの世が荒れていた『大戦』という時代より以前にあつた職業なのだから。

「巴、コーヒー」

キセルをしまい、鬼人はカウンター越しの女に言った。彼女の名前は『戌亥^{いぬいともえ} 巴』。この喫茶店『時雨』の店長であり、唯一の従業員である。

歳は19。まだ少々幼さが残る顔立ちだが、その笑顔は女性と呼んでも申し分ない美しさがあつた。

「鬼人さん、お仕事は？」

「そのうち来る」

「でもそろそろツケが……」

「そのうち払う」

新聞を大きく広げ、鬼人は巴の言葉と視界を遮った。少々つつけ
んどんで無礼な振る舞いだ、これもいつもの事なのだろう、巴は
小さく肩をすくめると、またコーヒーの続きを入れ始める。

店内には小さな音量で有線放送がかかっている。曲は最近売り出
し中の若手シャンソン歌手の新曲。少しけだるい感じだが、鬼人し
か客がいない喫茶店には似合っているかもしれない。

唐突に鈴の音になった。入り口につけられた鈴だ。

鬼人が視線だけを入り口に向けた。少しばかり期待を込めた眼差
しで。

「先生!!」

しかしそれもつかの間、鬼人は再び新聞に目を戻した。入ってき
たのは15歳くらいの金髪の少年。しかし鬼人の興味は引かなかっ
たらしい。

「先生ったら!!」

少年が鬼人の袖を引き、子供っぽい笑顔で鬼人を先生と呼ぶ。巴
が笑った。けれど鬼人は笑わない。

「きくじくんとくしくひくこくせくんとくせいっ!」

バシッ、と小気味のよい音がした。見れば鬼人は新聞を畳んでお
り、その横の少年は頭を押さえていた。

「ハエが・・・」

「しれっとした顔で嘘言うのやめてください!!! 人の頭叩いておき
ながら!!!」

「あ、まだ飛んでる」

再び小気味いい音がして、少年が頭を押さえて倒れた。もちろん
ハエなど飛んでいない。ただ鬼人の表情から推測すると、ハエの羽
音以上に少年——『戌亥^{いぬいそら} 楚良』の言葉が、彼にとって耳障りであ
ったことに間違いない。

「なんだ、ハエじゃなくて楚良か・・・」

「・・・・・・」

それ以上叩かれるのを恐れてか、楚良は鬼人を睨みながらも彼の

横のストウールに腰掛ける。

「姉さん。僕にココアちょうだい」

「はいはい」

弟である楚良に頷き、巴は鬼人のコーヒーを先に出した。

「ねえ先生？」

唐突に楚良が切り出した。しかし鬼人のムツとした表情は変わらない。

「俺はお前の先生じゃない」

「でも僕、先生の弟子になるって決めたんです」

「いつ？」

「この前」

「俺は知らない」

「今知ったじゃないですか」

「弟子は取らぬ主義だ」

「主義なんて簡単に変えられるでしょ？先生フラフラした性格だし」
「……」

鬼人の顔をのぞき込み、楚良が笑った。

「いいでしょ？僕は素直に先生のこと尊敬してるんですよ」

「どうして？」

「どうしてってそりゃあ、先生に色々助けられたからですよ」

鬼人が閉口した。楚良がもう一度笑い、出されたココアを両手で包む。シャンソン歌手の曲が最後の山場を迎え、静かな店内に彼女の声だけが響いた。

鬼人がコーヒーを一口のみ、カップを置く。

楚良もココアを一口のみ、カップをコトリと置く。

「……帰るか」

それが鬼人の下した静けさの後の答えであった。

「ちょっと先生！」

「しがみつくな！俺は弟子も五月蠅い子供もいらなんだ！」

「いいじゃないですか！手となり足となって働きますからあ」

楚良が泣き声を上げると、鬼人が吼えた。他の客がいれば注意されるところだが、今は彼だけなので巴も笑顔で2人を見ている。騒がしいが、穏やかな午前の光景である。

其の式

騒ぎが静まり一段落すると、鬼人は不機嫌な顔で再び新聞を開いた。横では楚良が巴と笑顔を交わしている。どうやら、鬼人は楚良に負けたらしい。一見無愛想で無口なこの男も、根は優しく子供には甘いのだ。

「そうだ先生。お客さん来ました？」

「来ないからここで待っている」

「事務所でも作ったらどうです？疾風>>はやて<<さんみたいに」疾風とはこの店の常連で鬼人の友である。疾風は私立探偵というものを職業にしており、この店の近くに自分の事務所を構えていた。「金がない。それにこの店があるだろう」

「ここは姉さんのものですよ。先生の客引き場じゃないんだから」

「いいじゃないか。ちゃんと注文はしている」

「でも全部ツケじゃないですか」

「そのうち払うんだから、今でも後でも同じだろう」

特に悪びれる様子もなく、鬼人は新聞の文字を目で追い続けた。

ふと、鬼人は一つの記事に目をとめた。

殺人事件の記事だった。

「殺人か……。都も物騒になったものだな」

『女の首を狩る謎の通り魔現る』との見出しに、鬼人は思わずため息をつく。

「気が病むなら先生が捕まえたらどうです？先生の術なら……」

「俺は正義の味方じゃないんだ。それに、金にならない仕事はしない」

「普段の仕事だって、そんなにお金入らないじゃないですか」

楚良に言われ、鬼人は黙り込んだ。反論出来ないのだ。

鬼人の今の主な仕事は、依頼主が求める言葉の収集である。

特殊な術や言霊によって、鬼人は人の記憶や知識や想い出。そし

てこの世とは違う『場所』から言葉を探し、呼び出す。そうやって依頼主の求める言葉を聞かせることによって、鬼人は細々と食っているのである。

例えば、聞くことができなかった親や友の死に際の言葉や遺言。忘れてしまった大切な約束の誓い。もう一度聞きたいプロポーズの台詞。・・・などなど、依頼主の要望であれば、鬼人はどんな言葉でも探し出す。

だがはつきり言って、ただの言葉一つに高い金を支払う輩などこの世にはいない。一つの仕事をしても、入ってくるのはせいぜい万の単位がつくつかないか。それも次々に仕事に来るわけではないから、彼の財布はいつも軽いのである。

「俺だって、好きで貧乏やってる訳じゃないんだ」

「なら、もっと大々的に宣伝すればいいじゃないですか。口コミだけじゃあ、今はやっていけませんよ」

「俺の術はひけらかすもんじゃない。これくらいが丁度いいのさ」
鬼人は言って新聞を畳んだ。楚良は不服そうだったが、扉の鈴が再び鳴ったので、そちらに気が反れたようだった。

「いらっしゃい。好きなのところにどうぞ」

巴が声をかけたのは、十くらいの少年だった。客にしては身なりが非道く、来ているのは粗末な着物。どう見てもお金を持っているようには見えないが、少年の目は巴とその側にいる鬼人へと向いていた。

「俺に用か？」

少年の視線を見抜き、鬼人はカウンターから横のテーブルへと席を変えた。少年は頷き、持っていたメモ用紙を鬼人へと差し出す。

「疾風の字か。・・・あいつに紹介されたのか？」

「お金・・・ないけど。この人なら相談に乗ってくれるって言われた」

その言葉に、鬼人はしばし黙り込む。

「あの野郎。自分のとこに来た客を、金がないという理由で俺に回

したな」

「疾風ならやりそうね」

巴が、少年の分のココアをテーブルに置きながら言った。

「僕、お金ありません」

「いいのよ。お金はこのお兄さんが払ってくれるから」

鬼人は一瞬顔をしかめたが、巴につま先を思い切り踏みつけられ、痛みの余り文句を飲み込む。

「ともかく話は聞こう」

「ありがとう」

少し大きめのカップを持ち上げ、少年はココアを飲んだ。

「俺の仕事、わかるか？」

「探偵さんに教えてもらった」

「それで、君の依頼はなんだ？どんな言葉が欲しい？」

尋ねると、少年はじつと鬼人を見つめた。少しばかり彼を疑っているようだった。

「言わなきゃわからん」

少しウンザリしながらも、鬼人はキセルを取り出し、気長に少年の言葉を待つ。

少年はまだ黙っていたが、鬼人は天井に向かって煙を吐き出しながら、ボンヤリとラジオの音に耳を澄ます。男の低い声が美しい、どこかの民謡がかかっていた。題名は聞いていないのでわからないが、都から遠い地方の民謡のようであった。

「僕・・・」

煙がくすぶるキセルから、鬼人の視線が少年へと移る。

「僕、父様がなんで死んだかを知りたい」

「死の理由か・・・」

「気が付いたら、体だけが家の前にあった。だから、なんで死んだか知らない」

「死んだのはいつだ？」

「半年前」

少年が、体の震えを隠すようにココアを一口、口に含んだ。

「俺が呼び出すのは言葉だ。親父さんは呼べない」

「父様の最後の言葉を聞けば、何かわかるかもしれない」

「最後の言葉が苦痛に満ちた絶叫だったらどうする？・・・そんなもの、聞きたくはないだろう」

「でも・・・」

「金も度胸も覚悟もない奴からは仕事は受けない主義だ」

そう言い放ち、鬼人はキセルをくわえてカウンターの席へと戻った。

「お金は稼ぐ・・・」

「やらんと言ったらやらん」

「度胸もつける。覚悟だってある！」

少年が鬼人の横に立った。

「今知らないで、父様が殺人犯になっちゃう！だからお願い！」

少年の言葉に、鬼人の眉が少しばかりつり上がった。

「殺人犯か・・・面白い冗談じゃないか？」

「嘘じゃないよ！」

「嘘でも本当でも、俺はやらん」

「どうして？」

「理由はさっき言った」

キセルをくゆらせながら、鬼人は横目で少年を睨む。

「帰れ。ガキは嫌いだ・・・」

少年が、思わず目に涙をためた。

「・・・やっぱり、人間なんて醜い」

かすれた声でそう言って、少年はトボトボと店を出て行く。再び鈴が鳴って、扉が開いた。

「後悔させてやるからな！！」

最後にそれだけ吐き捨てて、少年は一目散に店から出て行った。

「先生、ちょっと言い過ぎじゃないですか？あの子が可哀想ですよ」
少年の姿が消えて一分もたたぬうちに、楚良が抗議の声を上げた。

何も言わないが、巴もやはり不服なのだろう。鬼人の方を小さく睨みながら、彼が何か言うのを待っている。

「仕事をするのは俺だ」

「でも先生・・・」

「俺には俺の考えと言葉がある。あのガキに何を言おうと俺の勝手だ」

その場の雰囲気は苛立ちを隠せなくなり、鬼人はキセルをくわえたまま椅子から立ち上がった。店から出る気なのだろう。

「お勘定」

巴が言った。

「ツケとけ。いずれまとめて払う」

其の壱

店を出た鬼人は、キセルを片手にブラブラと道を歩いた。店を営む小さな建物が連立するここは、商業区と呼ばれる都の西に位置する区域だ。

都には他に、中央庁、居住区・農業区・拌み区などの区域があり。それぞれには検問があつて、通過するには『手形』が必要だった。たいていの人は、中央庁を除くすべての区へ行き来出来る赤い手形を持っていて、それで住居と仕事場を行き来している。

中央庁は都を治める天帝の住まう場所で、政が行われる都の中心。普通の市民には決して立ち入ることのできない特別な場所であるが、入れなくても困る人は誰もいない。

そんな中央庁を囲むように、北には拌み区、西には商業区、南には移住区、東には農業区があり、一つの区の大きさが約村十個分だから、都の大きさはかなりのもの。特に、寺院や『物の怪、呪術師』が集う拌み区と、広い田園が続く農業区の広さは格別で、歩いてまわるのには半日かかるとも言われていた。

鬼人がこの広い都に越してきたのは半月ほど前。

それまでは、村から村を渡り歩く生活をしていた。だから彼は特にこの都の広さを感じる。広さと同時に、都に住まう『暗さ』も鬼人は感じる。

「おおーい」

突然、鬼人は見覚えのある顔を見つけた。

「おおーい、鬼人ー」

道の向こうから元気に手を振るのは、十七・八の青年。茶色い髪を後ろで縛り、髪と同じ色のキチツとした洋服を着込む青年は、鬼人の苦手な相手の1人だった。

「疾風・・・」

にこにこ笑うのは、青年に見えるが実は女。そして彼女こそ、私

立探偵を営む『御剣疾風』みつるぎはやてくである。

「今喫茶店に行こうと思ってたところなんだよ。君の所にお客が行っただろ？」

「来たな。すぐに追いついたけど・・・」

「おいおい、なんでまた？」

「気に入らなかった。理由はそれだけで充分だろ？」

鬼人の言葉に疾風は苦笑する。

「君らしいね。でも、あの子が可哀想だとは思わなかったかい？理由は知らないが、何かを悩んでいたし・・・」

「それならお前が依頼を受ければ良かっただろう」

「何となく、君に任せた方がいいと思ってね」

外見だけでなく口調も男じみた疾風は、前髪をキザに掻き上げる。クセなのだろう。

「でも君、本当に断ったのかい？」

「ああ。もちろん」

「なら何故こんな所をふらついている？断ったのなら、店で次の仕事を待てばいいのに」

「・・・」

「鬼人君、君は相変わらず甘いねえ」

鬼人にニヤリと笑みを見せ、疾風は続けた。

「だが、僕は君のそう言うところが好きなんだ」

「俺はお前のそう言うスカした態度が大嫌いだ」

「ふふん。それは褒め言葉として取っておくよ」

楽しげに笑って、疾風は鬼人を見つめる。そのまっすぐな瞳だけは、年相応の少女のものだった。

「それでは鬼人。僕はノンビリお茶でも飲みに行くよ。君はせいぜい頑張ったまえ」

「すべてを見透かしてるなら、少しは手伝う気がないのか？」

「僕は忙しいんだ。何せ、御剣疾風は腕利きの私立探偵なんだからね」

ハハハとわらい、疾風はその名のごとく風のように歩き去った。

「俺と同じくらい収入がない、ボンボン探偵がよく言うぜ」

吐き捨てるように言って、鬼人は通に消えた腕利き探偵のことを頭から追い出した。

「・・・にしても、俺も本当に甘ちゃんだな。くそっ」

人の波をかき分けながら、鬼人は再び歩き出す。その手に握られたのは黒い手形。彼はいったいどこへ向かうというのだろうか。

其の式

疾風が店にはいると何人か先客がいた。お昼時だからだろう。

「疾風さん、いらっしやい」

姉の手伝いをしていた楚良が顔を上げ、先ほどまで鬼人が座っていた奥のカウンターを指した。

「オムライスと緑茶とストロベリーパフェを頼む」

取り合わせの悪い注文をし、疾風は椅子に腰を下ろした。店内に響くラジオにはノイズが混じり、歌は上手く聞こえなかった。先ほどから強くなった風の影響だろう。

「疾風さん聞いてくださいよ。先生ったら非道いんですよ！」

早速先ほどの話を始める楚良に、疾風は楽しそうに笑った。

「鬼人君はずいぶん派手に追い返したようだね」

「そりゃあもう。あれじゃあ、恨みを買っちゃいますよ」

「もしかしたら、それが狙いかもな・・・」

「え？」

「いや、こちらの話だ。それよりも」

側に置き忘れた鬼人の新聞をみて、疾風が軽く首を捻った。

「女ばかりを狙う殺人事件が続いてるようだね。巴さんも気をつけないと」

「あら？あなただって気をつけるべきじゃなくて？」

「ふふん。僕のような紳士はだいじょうぶさ」

「紳士は、オムライスと緑茶とストロベリーパフェをいっぺんには頼まないものよ」

「いいんだ、僕はお茶目な紳士だから」

得意げに笑う疾風。その自信はどこから来るのだろうかと思いつつ、巴は疾風の分と、他の客の分のオムライスを作る。

それを運ぶのは楚良の仕事だ。疾風だけは待てずに巴から直接皿を

受け取っていたが。

「楚良、ラジオ消しちゃって」

巴が言って、楚良は頷く。ラジオは会計を済ます入り口の台に置かれていて、楚良はすぐにそちらへと向かった。

茶色い小型のラジオからは、もう歌は聞こえなかった。

外で風がゴウと鳴り、その音と同じくらいノイズが大きくなる。

「嫌な風だなあ」

ふと口を出た独り言と一緒に、楚良はラジオのスイッチを切った。

『・・・かあ・・・お・・・かあ』

だが、ラジオからはノイズが止まらなかった。意味がわからず、楚良はラジオのスイッチを手で探る。

『・・・おっ・・・あ・・・おっ・・・かあ』

ノイズだと思ったそれは、掠れた子供の声で。楚良は思わずラジオから身を引いた。確かめたが、スイッチは既に切れている。

『おっかあ・・・』

微かだが、楚良の耳にはそう聞こえた。

「ねっ、姉さん!!」

思わず、楚良は姉の体にしがみつく。

「ちよっ、ちよっど?」

「姉さんお化けえ・・・」

既にノイズは消えており、姉の巴にその声は聞こえなかった。しかしそうとも知らない楚良は、ガクガクと震えながらラジオを指さし続けていた。

「離れなさいよもうっ! お客さんが見てるでしょ!」

「でもお化けが!」

「昼間から出るわけ無いでしょ? まったく」

楚良を無理矢理引きはがし、巴は仕方なくラジオの近くに立ってみる。

「ほーら、何にもいないじゃない」

巴は微笑んだ。

しかし、異変はそこで終わらなかった。

「ねえ、なんか店の外が騒がしくない？」

オムライスを平らげ、ストロベリーパフェにスプーンを突っ込もうと身構えていた疾風が、窓の外から見える人垣に気づいた。

「僕、見てくる・・・」

楚良が言って、扉を押し開けた。店の外は人が沢山いたが、小柄な楚良はその合間を縫って人々の視線の先へと近づいた。

「嫌ねえ。こんな昼間から」

一人の婦人が言った。

「これで何人目だよ？」

その後を若い物の怪の学生が続けた。

楚良はその時既に嫌な予感を感じていた。だが彼の体は人の波にのまれ、騒ぎの中心へと押し出されてしまっていた。

人々を取り囲む中心。そこにいたのはうつぶせに倒れた女性だった。白く血の気のない肌と藍色の着物を来たその人は、丁度楚良が飛び出した場所のすぐ側で倒れていた。

「ヒイツ」

ただ、その体には首がついていなかった。また不思議なことに血は一滴も流れていなかったが、楚良の意識はそれに気づく間もなく遠のき始めている。楚良は根っからの小心者なのだ。

「先生・・・」

何とか言えたのはその一言。

そしてその後すぐに、楚良の意識は深い闇へと吸い込まれた。

其の壱

楚良が意識を失っていた丁度その頃、鬼人はとある場所にいた。

そこは中央庁にある警察隊本部。都の治安を守る警察隊の、その名の通りの本部である。

警察隊の仕事は、主に都の治安維持と罪人の捕獲であるが、このほかにも細々とした仕事、検問の警備などや、一般人からのお悩みの相談、なんて物まで存在する。

それらは警察隊内に存在する一から二〇までの部隊がそれぞれ担当し、各部隊の隊士たちは、日夜都の安全と平和のために尽くしているのだ。

「五番隊隊長、砂原銀寺>>すなばらぎんじくくをお願いしたい」
そんな警察隊の本部入り口で、鬼人はとある人物を呼び出した。
出てきたのは黒い羽織を着た巨漢の男。彼が鬼人の言う銀寺らしい。

「すまないな、忙しいところ」

「いんや。お前ならいい」

「少し聞きたいことがある。例の女ばかりを狙う殺人犯のことだ」

「俺も多くは言えぬぞ」

わかっている、と鬼人は頷いた。

「犯人の目星はついているのだろうか？」

「まあな」

「そいつは誰だ」

「言えると思うか？」

「言霊師の俺に隠し事か？言いたくなければ言霊で引きずり出すぞ」

「・・・しかたない。だがここはマズイ」

目について来いと合図をして、銀寺は彼の所属する五番隊の隊室へと鬼人を導いた。

「あ、鬼人さぁん」

銀寺の女房で、五番隊の副隊長『砂原美里』>>すなばらみり<<』が寄ってきた。銀寺が30、美里は16。年の差は大きい、隊内でも評判のおしどり夫婦である。

「主人を借りるぜ。美里さん」

「はあい。じゃあ、お茶でも出しますねえ」

のほほんとした雰囲気的美里は、それに違わぬ口調でそう言った。

「相変わらずイイ嫁さんだ」

「羨ましかろう？ どうだお前も一つ・・・」

「嫁はいらない。一人がいいんだ」

「相変わらずだな、お前も」

「それで困ったことはないからな。こんなだが、今のままで十分さ」
鬼人は言って、出された茶をすすった。

「それで、例の話だが・・・」

「犯人と思わしき人物は二人いる。一人は物の怪。もう一人は人だ」
「どちらがやったのか目星は？」

「手口からこの二人の名が上がったが、二人とも行方しれずでそれ以外のことは全くだ」

「私たち五番隊は、犯人を捜すんじゃないくて捕まえるのが役目ですからねえ」

美里の言葉はもつともで、鬼人はそれ以上深くは尋ねなかった。

「にしても鬼人。お前またやっかい事に首突っ込んでるのか？」

「大したことじゃない」

「大したことじゃなきゃ、お前がこんなトコまで来るか」

「そうだな、そう言われると反論出来ない」

「何があった？ 俺で良ければいつでも助けにのるぞ」

銀寺の真剣な眼差しに、鬼人は少しばかりの笑みを浮かべた。

「子供を泣かせた・・・ただそれだけだよ」

湯飲みを置きながら、鬼人は先ほどの二人の名を聞き、それをメモして立ち上がる。

「恩に着るよ、銀寺」

「着る気があるなら返す気もおこせよ」

「そうだな、そのうち茶菓子でも持ってまた来る」

「そんなことよりお前、またこれを握る気はないのか？」

腰に携えた刀をポンと叩き、銀寺が尋ねた。

「ないね」

短い返事を返して、鬼人はヒラヒラと手を振りながら部屋を後にした。

其の式

外に出ると空に陰りが見えていた。雨が近いのだろうと鬼人は感じ、彼は南の門から居住区へと出た。

帰りに焼き鳥の串をいくつかと米を買い、鬼人は雨が降り出すより早く、住居のある長屋へと帰った。

居住区はその名の通り、都に住む人々の住居がある場所である。商業区や拌み区で店を構えるものや、中央庁で働く者でもないかぎり、ここに住居を持たない者はいないと言っても過言ではない。

帰宅した鬼人がいろりに灯を入れ、夕餉の支度をしていると、外では雷と同時に大粒の雨が降り出した。外をうかがえば、仕事場帰りの男達が慌てた様子で家へと駆け込んでゆく。降り出したばかりなのに非道い雨だった。ただでさえぼろい鬼人の長家は、いつ雨漏りが起きてもおかしくない。

「やれやれだ」

壁に貼ってある木札に触れ、鬼人は雨漏りを防ぐ為に素早く言霊を込める。

『我 弾く 神の涙』

鬼人の周りが一瞬赤黒く光り、その光が鬼人の言葉と共に木札へと吸い込まれていった。

「おい？ 鬼人、今あれやったけえ？」

外から声がして振り向くと、同じ長家の爺さんがひょっこり顔を出している。爺さんとは言っても、彼は人ではなく小鬼だ。

「ああ、これで今夜は持つ」

「ほんなら、またウチも頼むなあ。ほれ、お駄賃」

と言って小金を投げ込み、爺さんは鬼人の手を引いた。

「まだやるとは言っていないぞ」

とは言うが、鬼人に断る気はもちろん無い。

「鬼人さぁくん、あたしんトコも頼むよ！」

「鬼いゝゝ、ぼくんちもゝゝ」

「鬼人、俺のトコも頼むぜ!!」

だが、一度請け負うと今度は至る所から声がかかる。

「はいはい、今行くから飯でも食ってろ」

少しばかり楽しそうに笑って、鬼人はそれぞれの家にかかった木札に術をかけてゆく。これは昔、鬼人が言霊を込めるために配った物だ。

財布は軽いと言うが、こういう小金稼ぎが実はいい金になることを、鬼人は最近気づいた。始めは金など取るつもりはなかったが、皆が無理矢理渡すので、彼も最近では何も言わず受け取るようになっていた。

今日も、ずぶ濡れになりながら家々にまわって稼いだ金は、三分の食費に値する額だった。ついでに酒瓶と漬け物もお土産に貰って、鬼人の食いぶちは当分つながれたことになる。どれもこれも、気前の良いご近所さん達のおかげである。

「さてと」

少し冷めたご飯と焼き鳥を前にして、鬼人は家の戸を閉め、囲炉裏のそばにどっかりと腰を下ろす。

「出てこい。取って食いはしないから」

酒瓶の蓋を開け、鬼人は一口飲んだ。彼の後ろの戸棚の奥から音がして、何かがゴソリと動く。

「ほら、飯にしよう」

振り向き、鬼人が手を差し出すと、戸棚の奥から小さなイタチがちょこんと首を出した。

イタチはきよろきよると辺りを見回した後、少しの間じっと鬼人を睨む。

鬼人が小さくため息をつき、焼き鳥の串を一つ手に取った。イタチは始めじっと鬼人を睨んでいたが、焼き鳥の臭いに負け小さく涎をたらす。

「食いたいかな?」

鬼人が尋ねると、イタチはこくと頷き。そして慌て手首を横に振った。

「昼間のことで俺を恨んでるんだろ？ お前・・・」

イタチがビクリと動きを止めた。

「俺をだませると思ったのか小僧？ どうせ、昼間の仕返しをかねて寝込みを襲うつもりだったんだろうが、俺はそこまで甘くないぞ」

イタチが涎をすすり、再び鬼人を睨んだ。

このイタチこそ、昼間彼の元へとやってきた少年であつた。

「いい毛並みだな。お前人と交わってない純血の物の怪だろう？」

イタチが、なお鬼人を睨んだ。

「変化の術もなかなかだった・・・。まあ、しゃべり方がちょっと片言だったけどな」

串から鶏肉を外し、鬼人は手のひらにそれに乗せる。

「ほら食えよ。さすがに昼間はちよつと言い過ぎた、仲直りしよう」

イタチが小首をかしげながら、手に乗った肉に顔を伸ばす。

鬼人は身動きせず、そつとイタチの動きを見守った。

イタチが意を決して肉を口に入れた。小さい体にはそれが少し大きかったのか、彼は少し囁くとそれを前足で器用に掴む。

「美味いだろ。ここの焼き鳥は天下一品だ」

イタチがこくと頷いた。逆立っていた毛並みも落ち着き、艶やかな白い毛は穏やかに流れている。鬼人が言うとおりに、美しい毛並みだ。

「お前、どこに住んでる？」

手に付いたタレをなめながら、鬼人が尋ねた。

『都の東、流山』
ながれやま

それは古い物の怪の言葉だったが、鬼人はそうかと頷いた。

『僕の言葉がわかるの？』

「言霊師が扱うのは人の言葉だけじゃない」

『へえ、実は凄い人なんだね』

「『実は』は余計だ」

自らも焼き鳥を頬張りながら、鬼人は酒をグビッと飲む。酒豪なのだろう、先ほどからチビチビと煽ってはいたが、鬼人の顔に赤みがさすことはない。

『昼間の話、信じてくれる？』

パチパチと音を立てて燃え上がる炎を見つめながら、イタチは言った。鬼人もまた、無言で赤い炎を見つめていた。

「お前の父、名は『大蛇』^{おろち}か？」

『うん』

「誰でも有名な物の怪だ。俺も知ってる」

『・・・流山の主だった母様が死んで、父様は僕を食わせるために都に出稼ぎに行ってたんだ』

「中央庁直下の特殊剣客隊の副隊長をしていたそうだな。術に長けていたが、自惚れのない男だったと聞く」

鬼人が言うと、イタチの顔をつと涙が落ちた。

『父様、何で死んじゃったんだろ・・・』

「世間では行方不明と言うが、やはり死んだのか・・・」

『うん』

「そうか・・・」

何かを思いながら、鬼人は口の中に酒を含む。彼なりに、大蛇の死を哀れんでいるのだろうか。

「そうだ・・・お前名は？」

思い出したようにと言うよりは、思考を振り払うために、鬼人はイタチに尋ねた。

『密』^{ひそか}

「密か・・・父にそぐわぬ良い名だな」

『うん』

頷く密の頭をそつと撫で、鬼人は笑う。

するとその時だった、鬼人の家の戸が叩かれ、外から誰かの声が聞こえてきたのは。

「誰だ？」

「わたしです。巴です!」

鬼人が素早く身を起こし、戸を開けた。

「どうしたこんな時間に?」

「楚良が・・・、楚良が・・・」

鬼人の胸に顔を埋め、巴は泣いていた。

「楚良がどうした?」

たずねると、巴がようやく顔を上げた。その顔は疲労しきっており、目にためた涙は痛々しい。

「楚良が起きないの・・・。気絶したまま、ずっと・・・」

その言葉を聞いて、鬼人の顔から血の気が引いた。

「来い、密!」

密を素早く肩に乗せ、鬼人は傘を片手に巴を側に抱き寄せ外に出た。

「急ごう、楚良のもとへ連れて行ってくれ」

其の壱

巴と楚良の家は喫茶店の奥にあり、楚良は奥の寝室に寝かされていた。

巴が留守の間、楚良は疾風が見ていた。彼女も楚良のことが心配だったのだろう、鬼人が来ると彼に飛びつき楚良の無事を問いたてた。

「楚良、死なないよな？」

「わからん。それをこれから確かめる」

布団に寝かされた楚良の横にあぐらを掻き、鬼人は肩から密を降ろした。

『僕の所為かなあ・・・』

ふと、密が言った。

『僕、鬼人が出ていった後、ムシャクシャしてたからって楚良を驚かして遊んじやったんだ。ラジオのノイズに混じって泣き真似をしたら、すっごい怖がってて・・・』

「たぶんそれは関係ない。こいつはもとから恐がりなんだ、それなのに死体なんて見るから・・・」

鬼人は言って、目を閉じ意識を集中させた。

「落ちたのかもしれない・・・」

鬼人は楚良を見てそう思った。

「落ちた？」

巴が尋ねた。

「あちらの世界、『常闇』^{とこやみ}だ・・・理由はわからないが、きっと死体を見たときこいつは常闇に落ちた」

楚良に手をかざし、鬼人は閉じた瞳で楚良を見た。

彼が今行おうとしているのは、言霊師がよく使う『闇這い』と呼ばれる技だった。これはこの世のすぐ隣に存在する『常闇』という

世界に意識を走らせ、目に見えぬものを探すというもの。

普段は言葉を探すために使うのだが、今日は楚良の意識を探すために鬼人は用いた。

常闇は完全な闇ではなく、闇に覆われた世界のことを言う。だから鬼人が降りたそこにも、彼が住む世界と同じような建造物が建ち並び、死した人の魂や在り方が異なる異形のモノの気配がした。ただそれらはすべて闇に覆われているので、目をこらさなければ何があり、どんな生き物が動いているのかはわからない。そして何より恐ろしいのは、常闇に長居すると魂を食われてしまう事だ。常闇に住まう生き物か。それとも常闇を覆う闇その物かはわからないが、それらは外の世界の住民である鬼人などの魂に引かれ、取って食おうと牙を剥くことがある。

『楚良！』

常闇の中意識を降ろし、鬼人は言霊を放った。すると案の定、闇の奥で何かが蠢き、こちらに降りたばかりの鬼人の体を絡み取ろうと腕を伸ばした。

『寄るな』

再び言霊を響かせると、蠢くものはそろそろと手を引いた。だが彼らは諦めきれないのか、彼の言霊が早く消えないかと遠巻きに伺っている。

『楚良、こちらにいるのか！』

言霊を発しながら、鬼人は闇の中をゆっくりと歩いていく。歩くたび、地面に体を吸い込まれそうな感覚に鬼人陥った。世界そのものが鬼人の魂を引き込もうとしているようだった。

『楚良！』

気だるさを感じながら、鬼人は大きな言霊を放った。これで反応がなければ、闇に取って食われた事か、常闇に落ちていないと言うことになる。落ちていなければそれはそれでいいのだが、逆にもし食われているならば、呼び戻すことは鬼人でも難しい。

『いないのか？ 楚良』

最後に一度、鬼人は呼んだ。こちらに何かが駆け寄る気配はなかった。

『楚良・・・』

頭を垂れ、鬼人はその場から立ち去ろうとした。彼の勘から言えば、楚良はこちらに落ちたに違いない。けれどそれ以上この場にとどまるには、鬼人の体はひどく重く、闇が憑き過ぎていた。

『我 飛ぶ 我が――』

『待ちなさい』

言霊を使って意識を体に戻そうとしたとき、声は響いた。

『誰だ!』

『今からそちらに彼を送る。早く連れて帰るのだ』

言葉が響き、風のようなものが鬼人の体をすうっと吹き抜けた。

すると、何か暖かいものが体を抱きつく気配がした。視線を側に戻すと、いつの間にか楚良が側にいた。彼はパクパクと口を動かすが、そのどれもが声にはならなかった。

『喋らなくて良い。こちらで言葉を喋るには、言葉を言霊に変換させねばならない。お前には無理だ』

楚良が情けない顔で頷いた。

『戻るぞ。俺の体にしっかりと捕まっている』

だが、楚良は何故か首を横に振った。

『さっきの声の相手か・・・?』

鬼人の問いかけに、楚良が闇の奥を指さした。口パクだが、『誰かがいる』と言っているらしかった。

鬼人は目をこらし、もう一度闇を見つめた。先ほど鬼人を捕まえようとした蠢く者の奥に、確かに誰かがいるような気がした。

鬼人は一瞬言霊で呼びかけようかと迷った。しかしそれがこちらの世界の生き物だったとしたら、呼び寄せた途端それは鬼人を食おうとするだろう。それだけは避けねばならなかった。なにせいまは、楚良もこちらにいるのだ。

『行こう。今は時間がない』

楚良が悲痛な顔で闇を見ていた。しかたないんだ、ともう一度言
つて、鬼人は意識を自分の体へと戻す。
『我 駆ける 我が器へと』

其の式

瞼の裏から闇が消えて、鬼人は自分の魂が体に定着したことによ
うやく気が付いた。

目を開けると、疾風や楚良が彼を見下ろしていた。体が重く、額
には脂汗が浮かんでいる。

「先生、やっと起きたあ・・・」

楚良の言葉に、鬼人は一瞬怪訝な顔をした。

「俺は・・・」

「楚良が目覚めた後突然倒れたのよ。それでここに運んだの」
今更だが、鬼人は自分が布団に寝かされていることに気づく。

「・・・少し常闇に長居しすぎたのかな？ここまで疲労したのは始
めてだ」

そう言う口もひどく重く感じられ、鬼人は深く息を吐く。体が鉛
のように重く、動かすことができない。だがそれでも鬼人は、自分
を見下ろしている楚良に笑みを向けてやる。

「お前の所為でこの様だよ・・・」

「すいません」

「にしても、常闇の中でよく生きていたな。・・・普通の者なら
数分と持たずに吞まれるところだ」

「僕もよく分からないんです。ただ、気が付いたら真っ暗なところ
にいて、そこで知らない人に会って・・・」

「人だと？」

鬼人が心底驚いた顔をしたので、楚良は少々驚きながら先を続け
た。

「鬼人さんより少し年上くらいの綺麗な人でした。あつ、でも女じ
やないんですよ。男の人なのに綺麗な銀髪で、肌も凄く白くて・・・」

「

「銀髪の男か・・・」

「はい。その人が闇に襲われていた僕を助けてくれたんです」

「常闇に人が・・・。その者、かなりの腕を持つ呪術師なのだろうな」

自分で言っ、て、鬼人はしばし考え込む。常闇は、言霊師ならずとも呪術師なら誰でも知る異界である。だから、誰かが鬼人と同じように魂を常闇に飛ばしていた事も充分あり得るのだが、そのことを差し引いても何か引かかるところが鬼人にはあった。

まず一つ妙なのは、楚良があまりに長く常闇にいたことだ。彼が長く常闇にいると言うことは、すなわち彼を守った人物もまた同じ時間を常闇で過ごしたことになる。いくら腕利きの呪術師といえども、何時間も常闇にとどまり続けるのは不可能なのだ。ならば彼は何者なのかと言うのが問題になる。

そして二つ目に妙なのは、楚良を助けた男の容姿だ。

鬼人にはその容姿に覚えがあった。昔世話になった男で確かに呪術師としての才も人一倍あった男だった。

・・・けれど彼は既に死んでいる。常闇は死者のゆく異界でもあるが、死者は生きて常闇に落ちた魂には触れられない。だから楚良を守る事など不可能なのだ。

疑問が謎を呼び、謎は鬼人の頭を混乱させた。

ただでさえ疲れた体にさらに疲労を感じ、鬼人はぐったりとした顔で枕に力無く頭を垂れた。

「先生・・・？」

鬼人の様子に楚良が心配そうな顔をする。

「大丈夫。だが少し疲れた、寝床を借りても良いか？」

尋ねると、楚良と巴が同時に頷く。

「当たり前でしょ？あなたは楚良を助けてくれたのよ？」

「すまない」

言っ、て間もなく、鬼人の口からは穏やかな寝息がたてられた。そんな鬼人の額の汗を、巴は濡れタオルで優しく拭いた。たった数分

間常闇に降りただけなのに、鬼人の顔は少しやせこけたように見える。常闇にいることはもちろん、そこで言霊を何度も発するは高位の呪術師でも至難の業。それをこの若い言霊師は、一人の少年を捜すため幾度も幾度も強い言霊を放ち続けたのだ。普通の人間なら、精根尽きて死んでいてもおかしくはないだろう。

「ありがとうございます」

彼に掛けた布団を引き上げ、巴がつぶやいた。

其の壱

朝早く鬼人が皆のいる喫茶店へと出て行くと、楚良達は朝食を取っていた。

「おはよう・・・」

ボサボサの髪をかき乱しながら、鬼人はだらしない格好で欠伸を一つした。

「こらこら、そんな顔でウロウロしない」

まだ寝ぼけている鬼人を洗面所に押しやり、巴は言った。

「男の人ってホントだらしないのね。顔を洗って髪くらい梳かしなさいな」

「それが弟を助けてやった男に言う言葉か？」

「朝から皮肉ばっかりね」

「言霊師は口が達者でなきゃ務まらない」

「皮肉が多い人を口が達者とは言わないわ。それはただのひねくれ者よ」

顔を洗った鬼人にタオルを差し出し、巴はやれやれと首を振った。昨日は彼のことを尊敬し、格好いいとも思ったが、やはり鬼人は鬼人だ。ぶっきらぼうで、口が悪くてがさつで。でもそこが憎めなくて、巴は思わず微笑んでしまうのだ。

「髪を梳かしてあげる、動かないで」

「おいおいやめろよ。俺はガキじゃないんだ！」

「じっとしなさいよ。コレじゃあせっかく綺麗なあなたの髪が台無しよ」

男にしては少し長い髪を梳かし、巴は極めつけとばかりに髪結いで彼の髪を縛ってしまった。

「げっ、なんだよコレ！」

「鬱陶しそうだから」

「これじゃあ女だろう」

「もっと長くて縛っている人も沢山いるわ」

「それは呪術師どもだろう。あいつらは己の魔力を高めるために髪を長くする」

「あなただって似たような者でしょ」

「違うね。俺は言霊師だ」

「同じよ」

髪結いを外そうとする鬼人の手を止め、巴は笑った。

「その髪結いあなたにあげるわ」

「いらん」

「似合ってるのに」

「お前なあ」

そう言って巴から身を引き、鬼人は髪に手を伸ばした。

けれど目の前の巴があまりにもしょんぼりした顔をするので、鬼人は気まぎれになって手を下ろす。

「・・・でもまあ、いらないなら貰ってやる」

「ほんと？」

「そんな嬉しそうに笑うな・・・」

鬼人は言って、巴からプイと顔を背けた。

其の式

「・・・で、結局楚良は何で常闇に落ちたんだ？」

朝食を取りながら、行き掛かり上彼らと一夜を共にした疾風が鬼人に尋ねた。彼女はあの事がひどく気になったらしく、昨晚から鬼人が起きるのを今か今かと待っていたのだ。

「常闇に落ちると言うことはすなわち、常闇のモノに触れることだ」
「常闇のモノ？」

話を聞いていた楚良が尋ねた。

「常闇に住むモノだ。『物の怪』とも『人』とも『鬼』とも違う、異界のモノ。それは魂の根元に近いモノと言われていて、姿形は様々、害があるモノもいれば無いモノもいる。その常闇のモノが時たま常闇から弾き出される事がある。たぶん、それに楚良は触れた」
「言われてみれば僕、気絶する瞬間に変な風を感じました」

「常闇のモノは目に見えない。たぶんその風がそれだ」

鬼人がコーヒースすりながら、楚良が言う風について少しばかり考え込んだ。だがその考えを中断させるように、疾風が再び口を開く。

「その常闇のモノ、例の殺人事件と関係があるんじゃないか？」

「さてな」

「おいおい、もうちょっと関心を持ったらどうだい鬼人？」

「俺の今の仕事は殺人犯の捜査じゃない。密の親父の死因を探ることだ」

肩に乗る密の頭を撫でながら、鬼人はまだ話していない昨日の夕方
の出来事を皆に語る。

「じゃあ、先生の肩に乗ってるのが昨日の・・・」

「ああ。俺が叩き返したガキだ」

「なんだかんだ言って、先生やっぱやる気じゃないですか」

「成り行きだ」

「またまたあゝ」

鬼人にニヤリと笑い、楚良が言った。

直後、小気味いい音がして楚良が頭を押さえ倒れた。

「ハエが・・・」

「今日もですか！二日連続はズルイですよ！」

いつの間にか鬼人の手に握られているのは新聞紙。それはもちろん、楚良の頭を叩くために握られたのであろう。

「まったく、先生も人が悪い」

「弟子が悪いんだ」

そう言ったあと、鬼人は軽く舌打ちをして新聞をおいた。

そしてその置いたばかりの新聞を、鬼人は何気なく覗いた。昨日もまた犠牲者が出たとの記事が一面を飾っている。

「人と物の怪の女に、娼婦の赤鬼……。こいつには見境がないなまったく」

新聞から目を離し、鬼人がコーヒーをすすする。

「そろそろ警察隊が本腰をあげるだろうな。でもそうになると、鬼人君の仕事に支障が出るのではないかい？」

「どういう意味だ、疾風？」

「少々残酷なことを言うようだが、やはりこの事件。密君のお父上と関係が深そうだ」

「・・・・・・」

「名前の挙がっていたもう一人の容疑者。彼が昨晚ここから遠く離れた村に滞在している事が判明したそうだ」

「そうになると、必然的に犯人は絞られるな」

「残念だが、警察は大蛇の名前を犯人の一人としてあげているからなあ」

疾風がつぶやくと、誰かがバンツとカウンターを叩いた。化身の術で少年に化けた密だった。

「勝手な事言わないで・・・」

「でもそれが事実さ」

すまし顔で言いながら、疾風は密を軽く睨む。

「それに君、どうしてお父上が疑われているのかを知っているのか？」

「よく知らない。でも父様じゃない！」

「ふふん。ならば僕が教えて差し上げよう。殺された女達は皆首を切断されている。それもスパッと一撃でね・・・」

「それがなに？」

「となればだよ、犯人は被害者の側で刀や斧といった刃物を振り回していることになる。だがしかし、そんな物を持って死体の側に立つ人が、いまだ誰にも目撃されていない。昨日なんて、真っ昼間の大通りで人が死んだのにもかかわらず、犯人はおろか凶器の端っこすら拝んだ奴はいない」

一呼吸置いて、疾風は続けた。

「君のお父上は優れた呪術者だったそうだね。特に真空の刃を作り出す『カマイタチ』の術に置いては都一とも謳われていた」

密が思わず言葉を失う。

「人にも見られずに首を一撃切断する。カマイタチを使えば容易なことだろうが、都でこの術を完璧に使いこなすのは、名前が挙がっていた二人しかいないんだよ。そして一人の名はすでに消えた」

疾風が口を閉じ、密から視線を外した。

何も言えず、密はただただ地面を見つめた。瞳が少し潤んでいたが、泣くことだけは必死でこらえていた。

「密」

そんな密の頭を、鬼人が軽く撫でた。すると密が鬼人の胸元にすがりついた。

「父様じゃない！」

「お前の気持ちはわかる。しかし警察が疑っているのもまた事実」

「けどっ、けどっ！」

「正直、俺もこの事件。犯人は大蛇だと思っている」

密が思わず顔を上げた。けれど鬼人は、そんな彼を優しくなで続

ける。

「しかし何か裏があるはずだ。お前は大蛇のことを死者だと語ったし、なにより子を思う父が人殺しなどするだろうか？」

「じゃあ・・・」

「お前は俺に大蛇の死の理由を探れと言った。だから俺はその通りにする。彼が犯人であろうと無かろうと、仕事は仕事だ」

密の涙をぬぐって、鬼人は笑う。

「あんたは俺の依頼人だ。何があっても、仕事はきっちり終わらせる」

其の壺

朝食と身支度を済ませた鬼人は、密と無理矢理ついてきた楚良と疾風を連れて、都の東にある密の家へと向かった。

都からわずか数キロばかり離れただけに、そこは木々の生い茂る深い山だった。

山の名は『流山』。その名の通り、常闇とこの世を結ぶ聖脈が流れる事から、人と交わらずにいる野生の物の怪や鬼が多く住まう場所だ。常闇のモノも、ここには多く息づくと言われている。

「先生、どこまで登るんですかあ？」

「そうだよ鬼人君。こんな重労働、この私立探偵の僕には向かないんだ」

山に入ってそうそう、都会育ちに二人はねを上げ始めた。それに比べて鬼人は慣れたもので、案内役の密に遅れることなく続いている。

「早くしろ。迷うと物の怪に食われるぞ」

鬼人の言葉に二人は肝を冷やすが、足取りはいっこうに捗らなかつた。

彼らが歩いているのは細い獣道で、たぶんこの山の物の怪達が使っているものだろう。

都や村に住んで人と交わる物の怪や鬼もいれば、今もこうして山に息づくものもいるのだと、鬼人は道を歩きながら思った。きっと密やその父大蛇も、もとはこの山の主の一族として平和に暮らしていたに違いない。

「なあ密、お前の父は何故都に来た？」

「主である母様が死んで、山の聖脈が乱れた。父様ほどの力を持った物の怪になると、乱れた聖脈は体に悪いし、稼ぎを上げるには都の方が良いからって」

言われてみれば、鬼人も胸が先ほどからズキズキと痛んだ。これ

では力ある物の怪には住みにくいだろう。

「新たな主はたてないのか？」

「本来なら、主は力を新たな主に継承してから死ぬ。けど、母様は
獵師に殺された」

「獵師？」

「母様は白くて美しいイタチだった。だから体をほしがる者が沢山
いた」

「悪いことを聞いたな・・・」

「いい。鬼人には何でも話すって決めたから」

屈託無く笑って、密は楽しげに山を駆けていく。今は変化で人の
姿をしているが、やはり密は山の子だと、鬼人は思わずにはいられ
なかった。

「待って密あゝ」

鬼人の遙か後ろで楚良が泣き声を上げた。そしてそのさらに後ろ
では、疾風がバツタリと倒れていた。

「世話のかかる奴め」

鬼人は嘆いた。

其の式

密の家は、山頂の手前にあった。深い森の奥にひっそりと建つそれは、山の中にある屋敷とは思えぬほど大きく、意外にも何人もの使用人がいた。

「密様！」

鬼人達に気づいた物の怪の一人が、慌ててこちらにやってきた。羽織を着た蝦蟇の老人で、ひょこひょこ走ってくる姿が少し滑稽だった。

「どこへ行っていたのです？この一週間、山中探し歩いたのですぞ」

「ごめん『ガマ爺』。都に行っていた」

「都？何故そのような場所へ」

「父様のことを調べてた。そして今も調べている途中」

言って、密は鬼人と楚良。そして鬼人に背負われている疾風を紹介した。

「密がお世話になりました。私はガマ爺。この家の使用人の一人でございます」

「鬼人だ。言霊師をやっている」

途端に、ガマ爺がその顔に驚きの色を浮かべる。

「この暁の世に言霊師がまだいたのですね。この900年間、ふつりとは見なかったのに」

「ずいぶん長生きだな」

「そうでなければ、ガマ爺などとは呼ばれませぬ」

ケロケロと笑い、ガマ爺は鬼人達を奥の客間へと通した。

「にしても意外だな、物の怪の住居は人の住居と異なる物だと思っていたが？」

「実は僕のじいちゃん人間だった。だから、人間の家に住んでるし使用人もいる」

「使用人というか『使用鬼』とか『使用物の怪』ばかりだな」

「人間はじいちゃんだけだったから」

目を回している疾風を寝かせながら、鬼人は密の話を聞いた。聞いていると、青鬼の女が鬼人達に茶を持ってきた。香草が香しいさっぱりとした茶だった。

「にしても広い家だなあ。先生の家のご二十倍はありますよね」

「どうせ俺の家はボロだよ」

楚良の何気ない言葉に傷つく鬼人。

それほど、密の家は大きく立派なのだ。木造だが柱の一本一本、天井の梁の一つ一つにまで美しい装飾が施され、それらは日頃の手入れのおかげでピカピカに輝いていた。そしてそんな美しい装飾は十もある部屋すべてに施されていると言うから驚きだ。

「じいちゃんの趣味だったんだ。彫り物と建築が好きで、この家もじいちゃんが自分で建てた」

「良い趣味してるな」

側の柱に手を当て、鬼人は龍を象った彫り物を指でなぞった。

「さてと、俺はさっそく仕事に取りかかるかな」

「あ、お手伝いしますよ先生！」

「手伝いも何も、お前は何もできないだろう」

「じゃあ、仕事ついでに教えてくださいよ。いろんな事」

要領の良い楚良と、そんな彼に呆れる鬼人。二人は密の許可を得て、大蛇が使っていた部屋へと足を運んだ。

ここもまた広い部屋だった。部屋の隅にはダンスや本棚、机やその他諸々の家具が置かれているというのに、全くと言って狭さを感じさせない。

「で、何するんですか？」

「『釣り』だ」

「釣り？」

「物や場所には必ず誰かの思念や、その時発した言葉が残る。それを物から引きはがして視覚化する。魚を海面から引きあげるように、言葉を言霊という釣り竿で引き上げるんだ」

「だから釣り」

「そう」

部屋を中心に立って、鬼人はしばしの間目を閉じる。

「この際だ、お前に最も簡単な言霊の使い方を教えてやる」
指をきちんと鳴らし、鬼人は目を開けた。

『我 開く 第三の瞳』

途端に、彼らがいる部屋の色が抜けた。布を引くように、波が海へととって返すように、今まで視界を彩っていた色達がずっと消えたのだ。

「先生！」

「大丈夫、何も起きやしない」

モノクロの世界の中、色があるのは楚良と鬼人だけだった。

「凄いや、まるで写真の中にいるみたい」

キヨロキヨロと辺りを見回し、楚良が興奮した声で言った。

「これは少し高度な術だが、言霊師なら誰でも使える術だ」

「僕にもできるようになりますか？」

「そうだな・・・、これくらいなら人でもできるな」

言って、鬼人はその場にあぐらをかいた。

「これからお前にもっとも初歩的な言霊を教えてやる。言葉と呼ぶ言霊だ」

「言葉と呼ぶ言霊？なんか、変な言霊ですね」

「だが一番よく使うし、扱いやすい」

鬼人が言うと、楚良が彼の横へと腰をおろした。

「まず一番大事なことは、自分の言葉を信じてることだ。自分の言ったことを疑わず、それが起こす事を受け入れること。さすれば言葉は言霊に変わり、言霊は術へと変貌する」

「信じてることか・・・」

「そして次に大事なものは、言葉の順番だ。言葉を言霊にするにはまず、この順番を覚える事から始まる」

「言葉にも順番が？」

「まず始めが、『主語』でその次が『動詞』。この二つの順番さえ守れば、たいていの術は扱える」

そう言って、鬼人は白い巻物を取り出した。広げるとそこには何も書かれていなかった。

「たいていの場合、『主語』は自分のことをさす。言い方は何でも良いが、我、俺、私、拙者、などが一般的かな」

「先生は『我』って言いますよね」

「高度な言霊にはリズムとテンポも要求される。だから『我』が一番言いやすいんだ」

「なるほど」

「『動詞』は自分がこれから行う動作をさす。今回の場合は『呼ぶ』が適当だな」

巻物の一点に指を当て、鬼人は息を吸う。

『我 呼ぶ』

すると一陣の風が吹き、黒い紐のような物がどこからともなく現れた。それは鬼人の言霊に導かれるように宙を駆け、巻物のうえにピタリと張り付く。

「今のは・・・」

「今のはこの場に残った言葉の一つさ。巻物に文章が現れているだろう」

見れば、先ほど巻物に張り付いたのは紐ではなく文字の列だった。「凄いです!」

「文字が物から引きはがされ、巻物に張り付く様を想像するんだ。そしてそうしながら言葉を発すれば、口から出たその言葉は自然と言霊に変わる」

「『我 呼ぶ』でしたよね？」

「本当のところ、頭に浮かんだ想像図を壊さない言葉なら、多少意味が変わろうと関係ない。言葉と呼ぶ事を目的とするならば、『我 釣る』でも『我 巻物に導く』でもいいんだ。今の言葉でも、頭の中の像が壊れることはないだろう?」

「ええ」

「それに、時としてわざと言葉を崩すこともある。言霊ってのは美しい言葉とリズムを好むから、戦いに使う言霊などは、動作をそのまま言葉にしない方が良い」

「戦いで使う言霊なんてあるんですか？」

「ああ。・・・だがこれはちょっと勝手が違ってな。言葉の順番よりも、リズムや表現の美しさを重視する」

「なんだか難しそうですね」

「力のある言霊は『資格』がなければ扱えない。だからお前はこの程度で十分さ」

「でも、強いのも使ってみたいです」

「お前には無理だよ。それに教える気もない」

「どうしてです？」

「力があると使いたくなるのが人間だ。お前の心が弱いとは言わないが、必要以上の力は持たぬ方が身のためだ」

鬼人の言葉に楚良は少しがっかりしたが、それでも鬼人が自分の為を思ってくれているのだと思うと嬉しかった。

「さて、この部屋には言葉が多くある。手がかりにある言葉は少ないだろうが、あるだけ全部釣るぞ。手伝え」

「はいっ！ あっ、でも一つ質問です」

「なんだ？」

「先生は、主語と動詞の他にもう一つ言葉を付け加えるじゃないですか？ さっきも『我は 開く 第三の目』って・・・」

「あれは動詞を強める言葉だ。術をより強力にするためつけるが、お前はまだ二言で精一杯だよ」

「じゃあとにかく『我 呼ぶ』って言えば・・・」

と言うが早いか、巻物には新たな文章がピタリと付着する。鬼人だけでなく、楚良もこれには驚いた。

「お前、才能あるな」

巻物の文字に触れ、鬼人は苦笑した。

其の式（後書き）

※9／4 誤字修正しました（ご指摘ありがとうございます）

其の壱

楚良が部屋から出てきたのはお昼を少し過ぎた頃だった。鬼人は集めた言葉を整理すると言ってまだ部屋に籠もっている。本当は楚良もそれに付き添いたかったが、彼は心身共にクタクタだった。なにせ始めて言霊を使ったのだ。

先ほどの客間に戻ると、疾風と密とガマ爺が何やら話し込んでいた。彼らは楚良の存在に気づくと顔を上げた。

「鬼人君の様子はどうかね？」

「集めた言葉から手がかりを探しているところです」

「その様子だと、君も手伝いをしたようだね」

「ええ。生まれて初めて言霊を操ったんですよ！」

楚良は嬉しそうに話したが、疾風は少しいぶかしげな表情をした。「鬼人君が術を教えるとはねえ。あいつもだいたい丸くなったもんだ」「丸くなったって？」

「ほら、前はもっと刺々しい感じだったじゃないか。それが今は子供に先生とまで呼ばれるようになって・・・」

「昔の先生のこと、僕あんまり知らないですよね」

「ああ、そうか」

「疾風さんは知ってるんですか？」

「ふふん。僕は私立探偵だよ、それくらいの調べはついている」

「調べて疾風さん、あなた勝手に人の素性を調べたんですか？」

「そりゃあ、探偵だからね」

「依頼でもないのに勝手に調べちゃマズイですよ」

「でも君だって知りたいだろう？」

「そりゃあまあ・・・」

「ならいいじゃないか」

爽やかに笑う疾風に、楚良は引きつった笑みを返した。確かに彼だって鬼人のことは知りたいが、だからといって勝手に調べるのは

良くないと思う。

「とは言っても、僕も本当は良く知らないんだ。彼の周りを取り巻くのは噂程度の話ばかりだからね」

「噂？」

「そう、噂。しかしこの噂がどうも妙だね。もし噂が本当なら、鬼人君はとんでもない人物である可能性が高い」

これには楚良だけでなく、側にいた密やガマ爺までもが息を呑んだ。

「その昔、クロウという一人の武者がいたそうだ。鬼のような白い髪と物の怪よりも鋭い深紅の眼光の持ち主で、いつも血のように赤い鎧を着ていたと言われている。そいつは戦があるところに必ず現れ、そのたびに数え切れない数の人を斬った。そして手柄は取ってはその地を離れ、また新たな土地で人を斬る事を繰り返していたという」

「まさか、それが先生だって言いたいんですか？」

「鬼人の名前は九つの狼と書いて『九狼』。そしてお前は見たこと無いだろうが、あいつは強い言霊を使うと必ず髪が白くなる。そりゃあもう、鬼のようにな」

「でも、先生は武者じゃないですよ」

「武者をやめたってだけだろう。クロウの噂もここ半年ほど聞かなくなっただけだな」

疾風の言葉に、楚良は口をつぐんだ。彼の話が本当なら、鬼人は今まで多くの人を殺めたことになる。そしてそんな人を師として仰げるほど、楚良はお人好しではなかった。

「先生が人殺しだなんて・・・」

「そう落ち込むなよ。このご時世だ、人を殺すのを悪いとは言えないさ」

「でも人を殺してのうのと生きてる人を、僕は許せない・・・」

「なら鬼人君の弟子はやめることだね」

「そんな言い方しないでくださいよ！」

思わず怒鳴り返し、楚良は疾風から目を背けた。ただただ心が空しかった。さっきまでは鬼人の弟子であることがとても誇らしかったのに、今はその事がひどく辛かった。

「楚良、あんまり落ち込んじゃダメだ」

そう言ったのは密だった。

「鬼人さんはいい人。それに凄く優しい」

「それはわかってるけど・・・」

「わかってるなら悩むこと無い。楚良の先生は鬼人さんだけ。鬼人さんの弟子も楚良だけ」

密の言わんとしていることは楚良にも痛いほどわかる。けれど疾風の言葉はあまりにも重すぎた。

「ちよつと頭冷やしてくる」

その言葉を置き去りに、楚良は素早く部屋を出て行った。その様子を見た疾風が、居心地悪そうに肩をすくめた。どうやら、ようやく自分のしたことの重大さに気づいたらしい。

「これじゃあ僕が悪者みたいじゃないか」

「でも疾風さんが悪い」

「密までそんな事言うのかい？僕はただ事実を述べたまでだ」

「でも今言わなくても良かったと思う。時がくれば、鬼人が自分で楚良に全部話す」

「たしかに・・・な」

小さな子供に諭され、疾風は渋々自分の落ち度を認めた。

其の式

それが部屋を出てから一時間ほどの後、鬼人は人知れず大蛇の部屋から出た。

言葉のつまった巻物を仕舞い、彼は縁側で軽く背伸びをする。

不意に風が吹いた。心地よい風であった。

しかし鬼人の顔色はあまりさえなかった。それは今し方彼が突き止めた事実の所為でもあるし、違うことの所為でもあった。

彼は聞いていたのだ。楚良や疾風達の会話を・・・。

言霊師というのは耳が良い。それは声を聞くためではなく、心の言葉を聞くための耳のことである。だから鬼人には、疾風の言葉で楚良が悩んでいる事も、自分が二人にどう思われているかも知っていた。しかし知っているからと言って、鬼人はどうしようとも思わなかった。彼らの話が嘘であろうと誠であろうと、鬼人はそれに口を挟む気はないのだ。

もう一度のびをして、鬼人は欠伸を一つした。何となくやる気が萎えていた。

「あら、何かわかりましたの？」

と声をかけたのは、一つ目の女。たまたまそこを通りかかった使用人の一人だろう。

「まあな」

「にしても、すいませんねえ。密様のためにわざわざ・・・」

「子供に泣きつかれたら、誰だってそれなりのやる気はおこす」

「私もねえ、正直びっくりしてたんですよ。密様ったら、何の前触れもなしにいなくなってしまうんですもの」

「挙げ句の果てによそ者もヒョコヒョコ付いてくる始末・・・か？」
鬼人がいうと、女はケラケラと笑った。

「正直、ボロを纏って帰ってきた密様を見たときは驚きましたよ。」

でも、あなた達には感謝しておりますのよ」

「俺はまさか、こんな大層な家に迎えられるとは思っていなかったよ。始めて密を見たとき、あいつずいぶんみすばらしい格好をしていたからな」

「お金も持たずに出ていったみたいですの、密様ったら」

「それだけ必死だったんだろう」

吹き付ける風に目を細めながら、鬼人は言った。

「私もね、大蛇様のことは気になってはいたんですよ」

「あんたも見たのか？」

「何のことです？」

「大蛇の遺体だ。密の話では家の前にあったと言うが・・・」

「そりゃあ見ましたよ。なにせ、私たちがこの手で埋葬したんですからね」

鬼人が細めていた目を見開いた。

「・・・どこに埋葬したんだ？」

「ここから山を少し登った所にある墓地です」

それを聞き、鬼人がしばし沈黙する。何かを悩んでいるようだった。

「鬼人様・・・？」

「もう一つ質問を良いか？」

「え？ あっ、はい・・・」

「この近くに『ミヤベ』という名の者はいるか？」

「ええ。鬼のミヤベと言えばこの山で知らぬ者はいない猛者ですわ。山の聖脈が乱れたので、今は都で暮らしているそうです」

「都のどこにいるかはわかるか？」

「存じ上げませんねえ。それに私、彼はあまり好きにはなれませんの。前々から聖脈が乱れたことを大蛇様の所為にして、時々ここに来ては文句ばかりを言うんですもの」

「そうか・・・、ありがとう」

「例には及びませんよ。そんな事より鬼人様、そろそろお腹が空き

ませんか？」

「言われてみれば確かに」

「では山菜蕎麦でもお作りしましょう。私たちにできる礼と言ったら、おいしい物で鬼人様の腹を満たすことぐらいですから」

「そこまで言うなら頂こう、蕎麦は好きだしな・・・」

一つ目の女の笑顔に押され、鬼人は軽い足取りでその場を離れた。

其の壱

夕刻、巴の喫茶店に一人の男がやってきた。銀寺である。

「俺は都市警察隊、五番隊隊長砂原銀寺。ここに鬼人という男がいると聞いてきたのだが」

そう言って店に入ったとき、店には一人だけ客がいた。彼はこの店の常連で、銀寺の顔を見るやいなや、驚いた様子で箸を取り落とした。

「気にしないで、私が話してくるから」

巴は言って、そそくさと銀寺に近づいていく。

「たしかに鬼人さんは常連ですが、彼に何か用ですか？」

「あなたは？」

「巴と申します、この店の主です」

「俺は鬼人の友だ。実は少々困ったことになってなあ。至急鬼人に会いたいのだ」

銀寺の言葉に、巴が小首をかしげる。

「困ったことですか？」

「・・・鬼人に逮捕状が出たのです」

あまりに唐突な銀寺の言葉に、巴は思わず目を見張った。

「嘘・・・」

「嘘ではない。今世間を賑わせている女ばかりを狙う殺人犯の容疑者に、鬼人の名が上がったのだ」

「どうしてですか・・・。鬼人さんはそんなコトする人じゃありません！」

「実は、犯人とされていた大蛇という男の死亡が確認されたのだ」

「でもそれだけでは、鬼人さんが犯人である理由にはなりません」

「まあ聞け。その大蛇という男の他にもう一人、容疑者に上っていた男がいてな。そいつは呪術ではなく剣術で『カマイタチ』という

技を扱う男で、名をクロウという。その男と鬼人の人相似ていることから、警察は何か関連があるのではないかと踏んだ」

「そんなのこじつけです！」

「俺もそう言ったんだ。鬼人とは古い仲だし、あいつのことは色々知ってるからな・・・」

言葉を少し濁し、銀寺は無精髭を指で撫でる。

「けど警察の奴らは犯人捕獲に躍起になってる。まったくもって聞く耳がないのだ」

銀人の言葉に、巴は怒りを押し込め黙り込んだ。このままでは都に帰ってきた途端、鬼人は捕まってしまう。

「鬼人さんは今流山にいます。でもそろそろ帰ってくるかと・・・」

「帰ってくると困る！」

「そう言われても、私には何もできません！」

思わず喧嘩腰になってしまう二人。けれど二人の言い争いを鎮めるように、突然一人の男が現れた。

「悪いが話は聞かせて貰った。その男、俺が探してこよう」

戸口に立ったその男を、二人はポカンとした顔で見つめる。

「怪しいモノじゃない。俺もその鬼人と言う男に用があるのだ」

ニヤリと笑って、その男は二人の話も聞かず喫茶店を出て行った。

・・・不思議な、男であった。

其の式

その頃鬼人達は既に都にいた。都の北、拝み区と呼ばれる場所である。

拝み区はその名の通り、寺や呪術師の店が建ち並ぶ場所で、人よりの物の怪が多く住んでいた。ミヤベがいるならばここ以外には他にないと、鬼人は思ったのである。

今彼の後ろに付いてきているのは密と楚良の二人。疾風は疲れたからと言って家に帰ったらしい。まったくもって自己中心的な女である。

三人は今、拝み区にある二つ目に大きな寺院、『神龍寺』の境内に上がったところだった。

神龍寺はその名の通り、この地に眠るとされる龍神をまつた寺である。

「爺さん、いるか？」

境内の奥に向かってそう呼べば、彼は颯爽と現れた。法衣に身を包んだ彼の名は『遠海』>>えんかい<<』。今年で八十九になる新龍寺の住職である。

しかしこんなご老体が住職だというのに、この寺には他の僧が一人もいない。寺自体は大きく立派だが、あまり信仰はされていないのだろう。

「鬼人か、よう来たのう」

「まだ生きてて良かったぜ」

「馬鹿言え、わしゃあまだまだピチピチじゃよ」

見事な禿頭をポンとたたき、遠海は元気に笑った。

「して、何用かな？お主が用もなしに、老人の戯言を聞きに来たとは思えぬからのう」

「鬼を探している。ミヤベという鬼だ」

「ミヤベ・・・」

「そう、ミヤベ」

「知らん」

あまりにあっけない答えだった。

「せつ、先生・・・。ほんとにこの人大丈夫なんですか？」

「ん？」

「いや・・・、なんか今にも逝っちゃいそうですよ」

楚良の言葉に、鬼人が苦笑する。たしかに、気を許した途端ポツクリ逝ってしまいそうな雰囲気、遠海にはあった。

「だが腕は良いんだ。この爺さんは・・・」

「腕？」

楚良が首をかしげると、遠海が法衣の袖をめくりあげた。

「見とれ小僧！わしの能力を！」

「能力・・・？」

「わしには人の居場所を探り当てる特殊な能力があるんじゃない！」

「はあ」

気の抜けた返事の楚良に少々ムツとしながらも、遠海は軽く身構える。その表情は真剣で、楚良にもだんだん彼に特殊な力が備わっているような気がしてきた。

「見てろよ楚良、爺さんの“舞い”は一興の価値がある」

鬼人にそう言われ、楚良は小さく頷いた。疾風の話聞いてからは、あまり鬼人とは口をきかぬようにしていたのだが、この場の雰囲気、楚良は吞まれていた。

「ではゆくぞ！」

遠海の法衣が風に靡き、彼の足が大きく開かれた。

そしてそのあと、遠海は何やらぶつぶつ言いだした。それは合いの手のようで、彼はそれに合わせて異様な動きを取り始めた。

たぶん遠海は、鬼人が言う“舞い”をしているのだと思う。でも楚良には遠海が舞いを舞っているようには見えなかった。

「ふんっ！」

鼻息も荒く、遠海は妙な足取りでさらに激しく舞い始めた。しかしその姿はあまりに滑稽で、楚良は何とも言えないおかしさを感じる。

「そりゃくくく、どっこいしょおくく！」

くるりくるりとその場で回り、遠海は手をヒラヒラとばたつかせる。楚良の後ろで、ついに鬼人が腹を抱えて笑い出した。確かにこれは一興の価値があるかもしれないと、楚良も笑いをかみ殺しながら思う。

「せりゃあくく」

今度はつま先立ちでチョコチョコと蟹歩きをし、遠海は目を閉じて天を仰いだ。一心不乱に手を虚空に伸ばしている。まるで何かをつかみ取ろうとしているかのようだ。

「ふんがああああ！どーんーんーん」

合いの手は奇声に変わり、遠海は最後の締めとばかりに腰をくねらせ舞い踊る。

するとそこで、遠海の舞いは始まりと同じように唐突に終わった。体いっぱい舞を披露した遠海は、疲れ果てたのかその場に腰を下ろし、取り出した手ぬぐいで額の汗をぬぐう。

「どうじゃ、凄かったじゃろう」

たしかに、ある意味では凄かった。

「は、はい・・・」

言って、楚良は後ろにいる鬼人と密を見た。ふたりとも、舞いが終わってもまだ笑い続けていた。

「こら鬼人、わしの神秘的な舞いを笑うでない！」

「無茶言うなよ」

少々失礼な言葉を返し、鬼人は何とか笑いをこらえる。

「で、ミヤベの居場所はわかったのか？」

「うむ。この寺の近くにある『白刃』という名の居酒屋におる」

「ありがとな、爺さん」

「礼には及ばぬ・・・それよりも鬼人、お主何か悪さでもしたの

か？」

「何でだよ」

「舞っているとき、お前を捜すたくさんの意識を感じた」
舞いは飛び交う人の意識から、探している者の意識をつかみ取る
こと。それ故他者の意識もよく分かるのだろう。

「俺を捜す・・・？」

自分で言っていて始めて、鬼人は何かに気が付いた。

「くそっ、一つだけ心当たりがあるぞ・・・」

「女にでも手を出したのかえ？」

「違うよ爺さん。・・・にしても銀寺の口からあの名を聞いたとき、
何故この事を考慮しなかったんだ」

憎々しげな鬼人の言い方に、楚良が思わず眉をひそめた。

「先生、僕に何か隠してないですか？」

「何かとはなんだ？」

「それは先生が一番知ってる事じゃないですか！」

楚良に厳しく言われ、鬼人は閉口した。鬼人の後ろで密が思わず
ビクリと体を震わせる。

「だめだよ、喧嘩しちゃ・・・」

「密は黙ってて。やっぱり僕、先生に聞かなきゃいけないんだ」

楚良が鬼人の方に一歩歩み出た。だが対する鬼人は、そんな彼を
無視して背を向け歩き出す。

「すまないが話は後だ。どうやら今は時間がないらしい」

「ちよっと先生！」

「約束する。事が終わったらちゃんと全部話すから」

言って、鬼人は足早に楚良から遠ざかった。その背中が、今は何
を言っても無駄だと物語っていた。

「ズルイや」

残された楚良は言って、同じくぽつんと立っている密の手を引く。
「気をつけなされよ、若い言霊師・・・」

境内に腰を下ろしたまま、遠海は遠い目をしていった。

其の参

鬼人は居酒屋に着くまで一言も言葉を発しなかった。そして楚良もまた、無言で鬼人の背中を眺め続けていた。

「ここだな」

ようやく鬼人が口を開いたのは、居酒屋の暖簾をくぐろうとしていたとき。そしてその言葉に、楚良は何も返さなかった。

「いらっしやい」

たどり着いた店は細い路地にあり、あまり繁盛しているようには見えなかった。

店の主人は40ほどの狸男で、客は5人ほどいた。どれも鬼だったが、その中で一際目を引くのがたぶんミヤベだろう。

「ここで待ってろ」

楚良と密かにそう言って、鬼人はミヤベの側へと近づいた。

「なんだ貴様？」

「お前がミヤベだな。大蛇という男のことで少し話がある」

「何だと？」

ミヤベの眉間にしわが増えた。どうやら鬼人の態度が少々気に入らなかったようだ。

「人に話があるときは自分から名乗れよ！」

ミヤベが鬼人の胸元を掴んだ。

「鬼人だ。言霊師をやっている」

「言霊師？」

「探偵みたいな物だ。仕事で今大蛇のことを調べている、協力願いたい」

「嫌だね」

掴んでいた鬼人を地面に叩きつけ、ミヤベは下品な笑い声をたてた。それに合わせて側の鬼達も笑う。どうやら仲間のようだ。

「ずいぶん手荒なことをするな」

鬼人が起きあがった。その顔には傷一つ無い。

「俺も時間がないんだ。頼むよ・・・」

「もう一回叩きつけられたいか？ コラァ・・・」

「それは遠慮する」

「ならとつと失せな。せつかくの酒が台無しに・・・」

そこでミヤベは突然言葉を切った。彼の瞳には、楚良の後ろに体を隠した密が写っている。

「おいおいおいおい、誰かと思ったら密坊ちゃんじゃねえか？ ええ？」

鬼人を押しやり、ミヤベは楚良と密の前に立った。

「お前の父ちゃんの所為でな、オレ様はこんな薄汚い都に住まなきゃならなくなったんだよ？ この落とし前、つけてくれるんだろうなあ？」

「父様は悪くない・・・」

楚良の後ろに隠れながら、密は言った。消え入りそうな声だった。「お前の親父とお袋の所為だよ！ お前らの所為で聖脈が乱れて、オレ様みたいな力のある奴は、流山に住めなくなったんだ！」

「違うよ・・・。母様だって死にたくて死んだ訳じゃない！」

「知るかよそんなこと！」

側の壁をバンッと叩き、ミヤベは密かに意地悪な笑いを向けた。

「あの親父も親父でよお、新しい主をたてるとか言っておきながら勝手に死にやがった。やる事ちゃんとやってから死んで欲しいよなあ？」

「父様をそんな風に言わないで・・・」

密の瞳に涙が溜まった。けれどミヤベはそれを見て笑う。

「親父も親父なら息子も息子だ。泣く事しかできない無能だ！」

ミヤベがさらに大きな笑い声をたてた。すると後ろで黙っていた鬼人が、側の酒瓶を音もなく手に取った。

「何となく読めたてきた。ありがとう、一人でべらべら喋ってくれて」

言って、鬼人はもっていた酒瓶をミヤベの頭に叩きつけた。瓶は粉々になり、中の酒はミヤベの汚らしい角と髪に降り注いだ。

「だが、お前の言い方は少々癪に障る」

「てめえ・・・」

顔に流れ落ちる酒をぬぐい、ミヤベは肩を怒らせた。

「ぶっ殺してやる！」

ミヤベが叫ぶと、彼の仲間も立ち上がる。

「外でやってくれよお客さん」

狸男の主人は泣いたが、ミヤベは聞いてはいなかった。

ミヤベは拳を振り上げると、それを素早く鬼人に振り下ろす。だが鬼人は、それを体を反らして避けた。続けざまに後ろの鬼達も拳や足を振り上げるが、鬼人はそれらをいとも簡単に交わしてみせる。

「クソが！」

ミヤベが吼えた。しかし鬼人は以前冷静である。

「少し痛い目を見て貰うぞ、ミヤベ・・・」

「そりゃあお前の方だろうが！」

ミヤベの拳が再び空を切った。気が付けば、鬼人は彼から三步離れた場所にいる。

『白き鬼よ！鎖を断ち切り姿を現せ！』

鬼人が言霊を素早く紡いだ。

その途端、鬼人の髪が不自然に波打ち始めた。巴から貰った髪結いが弾け、今まで短めだった髪が一気に腰までの長さに伸びる。そして黒い髪の色が根本から白へと変わっていく。

「お前も鬼か？」

鬼人の変貌にミヤベが笑った。

「かもしれない」

鬼人が一度瞳を閉じ、再び開いた。今まで黒かった瞳が、今では鮮やかな紅に染まっている。

『拘束 神の鎖よ 一つに！』

甲高い金属音がして、ミヤベ達の首や手に突然銀の拘束具が現れ

た。その一つ一つは鎖でつながれ、鬼達は全く身動きが取れなくなっている。

「こんなもの！」

ミヤベが叫び、自慢の怪力で腕の鎖を引きちぎった。けれど鬼人の言霊はまだ終わりではない。

『熱き怒り 冷たき嘲り 刃となりて飛べ！切断！』

鬼人が腕の先で指をパチンと鳴らすと突然、ミヤベの酒に濡れた角が根本からポロリと落ちた。鋭い刃物で切られたように、角は二本とも綺麗に切断されていた。鬼人の言霊の力がやったのだ。

「オレ様の角が・・・」

「次は髪の毛を剃ってやろうか？」

「貴様あああああ！！」

ここまでされても、まだミヤベは鬼人へと向かってきた。すると鬼人は足を引き、身構える。

『能力封印 戦闘を終わらせる』

向かってきたミヤベの攻撃を避けると同時に、鬼人は右肘をミヤベの背中に叩きつける。それと同時になくなった言霊で鬼人の姿がまた変化した。彼はそれに気を止めることなく足を振り上げた。

「お休みの時間だ」

鬼人は強烈なかかと落としを放った。ミヤベが鬼でなければ、彼の骨は粉々に砕けていたであろう。

「これが見たかったんだろ」

不意に、鬼人は地面に落ちた髪留めを拾い上げながら言った。そして倒れたミヤベを踏み越え、楚良の側へと歩み寄る。

「この白い髪と紅の瞳が・・・」

楚良が身じろいだ。

「違うか？」

「違う」

楚良の言葉に、鬼人が居心地悪そうに肩をすくめる。

「あれを見てお前が何を思おうと勝手だが、一つだけ言わせてくれ」

楚良が鬼人の顔を見た。

「疾風の言葉をすべて鵜呑みにするな。あいつの仕事はいつもテキトウだ」

目を見開き、楚良が思わず口を開ける。

「それってつまり・・・」

「実はな、俺にはもう一人・・・」

言いかけてふと、鬼人は口をつぐんだ。

「先生？」

「外が騒がしい」

言うが早い、鬼人は店の外へと飛び出した。

店の前には小さな人だかりができていた。その光景に、楚良が昨日の事を思い出し気持ち悪そうに胸を押さえる。そんな楚良の背中をさすりながら、密が神妙な面持ちで涙を拭っていた。

「お前達は来るな、また倒れられたら困るからな」

鬼人だけが人垣を抜ける。そこにはやはり、首のない女の死体が転がっていた。

だが、鬼人は何かが引かなかった。良くはわからないけれど、何かがおかしい気がするのだ。

「おい・・・」

死体の横でかがみ込む鬼人に、側にいた男が声をかけた。だが、考え事をしていた鬼人に彼の言葉は聞こえなかった。

「おい貴様・・・」

男はもう一度言って、鬼人の視界に入るよう立ち位置を変えた。

「お前、鬼人九狼だな？」

鬼人が顔を上げた。

「現行犯でお前を逮捕する」

男が言った。鬼人は怪訝な顔をしたが、男は懷から取り出した手錠を鬼人の手首にかける。

「え・・・」

鬼人が我に返ったときには、既に五人ほどの男達が彼を取り囲ん

でいる。彼らが着ている白と黒の羽織から、鬼人は彼らが警察隊であることに気が付いた。

「ご同行願おう・・・」

「ちょっと待て、俺じゃない！」

「でもここにいたのが動かぬ証拠だ」

鬼人の手だけではなく首にも縄を回し、警察隊の隊士達は満足そうに笑った。

「皆様ご安心下され、犯人は捕まえましたぞ！」

人垣から歓声が上がった。そんな中、楚良と密だけは喜べない。

「先生が犯人だったんですか！」

連れて行かれる鬼人に楚良が言った。

「そんな訳あるか！」

「じゃあ何で逮捕されるんですか！」

その言葉に、奇人が楚良の方を振り返る。その途端、彼の顔に怒りに歪んだ。

「貴様！」

「こら、静かにしろ！」

男に小突かれ、鬼人は押し黙るほかなかった。そんな彼を、男達は無理矢理引っ張っていく。

「・・・密、先生今誰に怒ったの？」

「さあ？」

残された二人は、散っていく野次馬の中で立ちつくしていた。あまりに唐突な出来事だったため、どうすればいいかわからなかったのだ。

「おい、ガキ共・・・」

そんな彼らに救いの手を差し向けるように、彼は現れた。

白く長い髪と右目の黒い眼帯。そして瞳と同じ紅色の鎧が目に付く一人の男であった。

「あ・・・」

男を見て、楚良と密は同時に口をパクつかせる。驚きのあまり声

が出ないといった様子だ。

「お前あいつの知り合いか？ごめんなあ、オレがもう少し早く来れば助けられたのに・・・」

男は言った。

「あなた・・・、いたい・・・」

「あ、ごめんごめん。オレはクロウ。紅武者あかむしやのクロウっていえば少し有名だと思うんだけど」

そう言った顔はあまりに鬼人に似ていて、楚良と密は瞬きばかりを繰り返していた。

「名前は同じだけど、オレはさっき連れて行かれた奴の弟なんだ。兄弟揃って美男子だろう？」

クロウは笑うが、楚良達にとってそれは笑い事ではなかった。

其の壱

楚良と密は、クロウと共に巴の喫茶店へと戻った。

そこにはまだ銀寺がいて、入ってきた三人を見てしばしの間呆然としていた。

「あんたさっきの・・・」

と銀寺がいぶかしがる物だから、楚良が変わりにクロウのことを説明した。楚良が鬼人の逮捕劇についても説明をはじめると、銀寺ががっくりと項垂れる。

「このままじゃ先生、一生刑務所暮らしですね」

「なら、父様の事は誰が調べるの？」

「僕・・・じゃ頼りないし、疾風さんはなあ・・・」

楚良が苦笑していると、銀寺が二人をじっと見つめた。

「その子の父親って、あの大蛇か・・・？」

「はい。この子は密って言います」

「うむ。先ほど巴さんに少し話を聞いた。それよりあまり心配するな、鬼人はちゃんと戻ってくるよ」

今度はクロウの方を見て、銀寺は苦笑する。

「弟なら、俺の言っている事がわかるだろ？」

クロウが頷いた。

「たしかに兄貴が出てくるのにたいした時間はかからない。警察の奴ら、きつと後悔するぞ・・・」

「どういう事ですか、クロウさん？」

尋ねると、クロウは少しの間考え込む。

「たぶん兄貴は隠したがると思うが、弟子であるあんたにまで黙っている必要はないな。ようし、一つ語ってしんぜよう」

「お願いします」

楚良が頭を下げた。

「まずはオレのことを少し話そう。オレは見たとおりの武者で、名

は兄と同じクロウ。兄貴と違って呪術はからきしだが、剣術は得意なんだ。紅武者のクロウとか、カマイタチのクロウとか呼ばれている」

クロウの言葉に楚良があつと声を上げた。

「もしかして、今回の事件のもう一人の容疑者って・・・」

「彼がそうだ」

答えたのは銀寺だった。

「大蛇が呪術を使ったカマイタチの使い手なら、クロウは剣術を用いるカマイタチの使い手。それ故今回の事件の容疑者として名前が挙がった」

「そのおっさんが言うとおりに、オレの得意技はカマイタチだ。そのおかげで、戦場では色々と活躍出来たよ」

そう言うクロウの目は飢えた獣のようだった。疾風が言っていたように、きっと多くの人を殺して生きてきたのであろう。

「昔はな、兄貴と二人で戦場を巡ってたんだ。オレが剣術で兄貴が呪術。双子の兄弟って所為もあるけど、兄貴は良い相棒だった。けどある時、兄貴に都の天帝自ら呼び声がかかった。オレにはよく分からなけれど、言霊師って職業が理由らしい」

一度言葉を切って、クロウは懐かしさを感じるように遠い目をした。こういう時のクロウは、獣ではなく人の目をしていた。

「それからオレ達は都にやってきた。兄貴は天帝の下で働く呪術師になって、オレには『特殊剣客隊』って言う仕事を与えられた。天帝を守護するのが兄貴の仕事で、都を守るのがオレの仕事だった。・・・でも、オレは兄貴と違って気性が荒くてな。都にきて半年が過ぎた後、ちょっとした争い事を起こしちゃったんだ。もちろんそんなオレが剣客隊を続けられるわけもなく、オレは再び戦場に戻ったけどまさか、兄貴まで首になってたとは知らなかった」

「先生も首になっちゃったんですか？」

「じゃないのか？」

今度はクロウが疑問の声を上げる番だった。

「首になったんじゃない。自分でやめたんだ」

言ったのは銀寺。どうやら彼も、鬼人について何か知っているらしい。

「弟がやめたのを期に、鬼人は天帝に仕えることをやめちまった。

ちゃんとした理由はわからないけど、あいつは疲れたって言った」

「それで先生はここで言霊師を・・・」

「俺は戻って言うてるんだが、あいつは今の生活が好きらしいぜ。

『美人がやってる喫茶店で客を待ちながら、ガキのお守りをするのが今は幸せだ』とか言ってやがった」

銀寺の言葉に、巴が頬を紅く染めた。

「そんなの初耳です」

「僕もだよ」

「けど本当のことだ。それに来てみて思ったけど、確かにここは居心地いいや」

「そうですか？」

「ああ」

銀寺の笑顔に、巴がホッと胸をなで下ろした。

「だからよ、鬼人は絶対帰ってくる。それどころか、鬼人の素性がしければ警察隊全員で土下座する羽目になるかもしれん」

「それ見たいな」

「天帝自らが最高と褒め称えた言霊師だからな、あいつは・・・」

銀寺は自分のことのように誇らしげに言って、話を聞いていた楚良に目を向ける。

もし銀寺の話が本当なら、鬼人は都一の呪術師と言うことになる。いや都一どころではない、この国一番の呪術師である。

「良い師匠をもったな」

楚良が大きく頷いた。ようやく鬼人へのしがらみが解けたのと同じ時に、とても誇らしかった。

でもふと、楚良は思う。いくら最高の呪術師である鬼人が帰ってきたとしても、それでこの事件が終わるわけではないのだ。大事なの

はこれから、自分や師である鬼人がこの事件をどう解決するのかだ。
「結局、この殺人事件の犯人は誰なんでしょうか？密のこともあるし、もう無関係を決め込む気にはなれません」

「俺達警察も、これから捜査の洗い直しをせにやならんだろうな」
「容疑者は全員白なんですよね？」

「ああ。クロウにはアリバイがあるし、大蛇は既に亡くなっている」
「・・・でも、先生は犯人は大蛇じゃないかって言っていました」
「なに？」

銀寺が眉をひそめた。

「銀寺さん、大蛇は本当に死んでいるんでしょうか？」

「死んでいるも何も、その坊主が証人だろう？」

銀寺が密を見た。対する密はどこか居心地悪そうに体をすくめていた。その目に、少しばかりの動揺が浮かんでいる。

「密？」

楚良がそんな密の動揺に気づき、彼を見つめる。密が、小さく息を呑んだ。

「密、君は何か隠し事をしてるね？」

楚良が問いつめた。

彼だって本当はこんな事をしたくないが、事件の進展の鍵を握るのは密だと、楚良は何となく感じていた。

「ごめんなさい、僕まだ大切なこと話してない」

「それは何？」

「僕が何故、父様の死んだ理由を調べたかったか」

密の言葉を聞いた一同は、すぐさま彼に注目した。

「僕見ちゃったんだ・・・。父様のお墓から、黒い影みたいのが出てくるのを」

「黒い影？」

「正確に言う、お墓から出てくる父様の体に黒い影がくっついてたんだ。その時は怖くて仕方なかった、始めはただの見間違いだって思った。けど、やっぱりその事が忘れられなくて・・・」

「だから最初、疾風さんの探偵事務所に行ったんだね？」

「恨みをもって死んだ人は生き返るって話を聞いた事があった。もしかしたら父様もそうなのかなって・・・」

「だから死の理由を知りたかった訳か」

「ようやく納得し、楚良は密の頭を優しく撫でてやる。」

「話してくれてありがとう」

「怒らないの？」

「うん。だって先生も、きっと君を咎めたりしないと思うから」

楚良の優しさに、密は思わず涙をためた。けれどそれが流れ落ちる前に、密は急いで涙を拭った。

「ねえ楚良、やっぱり犯人は父様なんだよね？」

「それは僕もよく分からないよ。先生なら、何かわかるのかもしれないけど」

首を捻りながら、楚良は彼なりに頭を働かす。しかしやはり、密の話を聞いてもなお謎は解けない。

「とりあえず、疾風さんの所にでも行ってみようか？このまま先生を待つより、今は自分たちでできることを少しでもしなきゃ」

「疾風さんは探偵だから、謎が解ける？」

「うーん、僕たちだけで考えるよりは多少良いかも」

疾風のあの性格を思い出し、楚良は少しだけ不安になった。けれど密の前なので不安は顔には出さず、無理に笑顔を作ってみせる。

「姉さん、僕たち疾風さんの事務所に行ってくるよ」

「それならオレも付いてくぜ。なんだか面白そうだ」

と言ったのはクロウ。

「ならば俺は、本部に戻って鬼人の様子を見てこよう」

「じゃあ私は、ここでみんなの帰りを待ってるわ。私にはここで静かにコーヒーを入れるくらいしかできないけれど、全部解決したら戻ってきてくださいな」

巴の微笑みに、楚良が大きく頷いた。

「行ってきます、姉さん」

其の壱

鬼人は警察隊本部の地下にある、狭い牢屋の中に入れられていた。後ろを土壁、三方を木の格子で囲まれたそこは、お世辞にも居心地の良い場所とは言えない。

だが、今起きている事件について頭を整理しなかった鬼人には、ここは絶好の場所であった。

彼がここに入られてから既に、二時間あまりの時間がたっている。その間ずっと、鬼人は自分の頭を飛び交う様々な憶測や、考えをまとめるのに奮闘していた。

さすがの彼も、密が楚良達に明かした秘密まではまだ知らない。いくら耳が良い言霊師といえども、ここまで遠く離れた場所の言葉を聞き取るのには無理がある。

だがその事を抜きにしても、鬼人の頭の中には何となく事件の全貌が見えようとしていた。

彼がまず始めに注目したのは、先ほどのミヤベの言葉である。あの鬼は日頃から、大蛇に新たな主をたてるよう迫っていたらしい。その事できつと、大蛇は悩んでいたのだと鬼人は思う。

彼は昔から真面目な男であったことを、鬼人は知っているからだ。実は、鬼人は大蛇とは面識があった。

大蛇は、鬼人の弟であるクロウが所属していた特殊剣客隊の副隊長。クロウのことでは色々世話にもなったし、種類は違えど同じ呪術を扱う者として、それなりの交流もあった。

数年前に、鬼人が弟の後を追う様に都を去ってからも、しばらくの間彼とは文のやりとりがあった。その時は彼が悩みを抱えていたとは知らず、都で働いているのも、まさか住みかを追われた所為だとは知らなかった。

だからと言って、大蛇が悩みを苦に自殺したとは鬼人は思えなかった。大蛇は息子や家の使用人達を残して死ぬような男ではないの

だ。

あのミヤベが殺したという可能性もあったが、確率的にはきわめて低い。

鬼人は先ほどミヤベと争ったとき、さりげなくミヤベから言葉間を採取していたのだ。だが彼から読み取れた言葉は、どれもこれが大蛇に対する怒りであって、殺意人を犯した罪の意識や、大蛇に対する殺意などと言う物ではなかった。

ミヤベは大蛇の死のきっかけであって、理由はない。言霊の採取から、鬼人はそう結論づけた。

「大蛇、あんたはどうして死んだ・・・」

思わずそうつぶやき、鬼人は土壁に背をもたれた。冷たさが背中を這い、背中感覚がほんの少しだけ変化していく。

それは常闇に降りるときの感覚に似ていた。人としての感覚が失われ、自分の在り方や、自分の存在その物が変化していく感覚。それは少し恐ろしくて、どこか満たされた気持ちになる瞬間。

「常闇・・・」

口に出して言って、鬼人は気づく。

彼は唐突に思い出したのだ、今日の朝、楚良が口にした言葉を。

『鬼人さんより少し年上くらいの綺麗な人でした。男の人なのに綺麗な銀髪で、肌も凄く白くて・・・』

その言葉を聞いたとき、鬼人の頭には一人の男の名が浮かんでいた。その時は何故か気にも止めなかったけれど、今なら事の重要性が見える。

鬼人は壁から背を離し、床にあぐらをかいて座った。

彼は今、再び常闇へと降りようとしていた。たぶんそこに、一つ目の答えがある。

鬼人がゆっくりと目を閉じた。彼は瞼の裏で、深い深い闇を見つめた。

其の式

『やはり来たね、九狼』

鬼人が降り立つと、彼はそこにいた。暗闇の中で、彼の姿だけがはっきりと見える。体に光を纏っているからだろう。

『久しぶりだな、大蛇』

鬼人の言霊に、大蛇は満足そうに笑った。楚良が言うように、女のように美しい男だった。

『もっとこちらに来なさい。私の光が届くところであれば、闇に喰われる事はないから』

『聞かせてくれ、あんたの身に何が起きた？今のお前はまるで、常闇の世界の者のようだ』

大蛇が笑みを消した。

『私は儀式に失敗したのだ。そしてこちらに捕らわれた』

『儀式？』

『君は私の悩みを知っているね？ミヤベにも話を聞き、私の部屋で多くの言葉を探したのだから』

『流山のことだろう』

『そうだ。私は予てから、聖脈が乱れたあの山のことが気がかりだった。主を失った山には、私やミヤベのような霊力の強い者は住めない。私たちだけではなく、多くの物の怪達もまた、山を追われた』
『だがそれは事故だったのだろう？』

『たしかに、主である妻は人に殺されたのだ。けれど、だからといって山の事を黙って見過ごすわけには行かなかった。だからこそ、私はここに降りたのだよ』

側の闇に手を浸し、大蛇は悲しそうに微笑んだ。

『私はここで妻を捜そうと思った。ここならば妻の魂が見つかると思っただけ』

『探して何をしようとした？』

『妻の魂から主の力を引きはがそうと思った。そして私が変わりに主になろうと思った』

『けれど失敗したんだな』

大蛇が頷いた。

『妻には会えた。しかし妻は妻ではなかった。主の力は引きはがしたが、妻の魂に取り憑いていた常闇のモノに襲われこの様だ』

『闇に喰われたのか？』

『少し違う。常闇のモノに体へと帰る道を絶たれたのだ』

『どういう意味だ？』

鬼人が尋ねると、大蛇は少しばかり考え込む。

『体を取られた、と言う言葉が一番近いかもしれない。私の油断をつき、常闇のモノは私と私の体をつなぐ道を絶ちきり、己が現世へと出ていった』

『うつしょ？』

『こちらの言葉で、お前達の世界のことを言う』

『・・・ずいぶんと、常闇の世界に染まってきたな』

『長くいれば誰だってこうなる』

大蛇の言葉に、鬼人は少しばかり胸が痛んだ。彼はもう戻れないのだ、息子のいる現世へは。

『と言うことは、あんたの体に入った常闇のモノが現世で悪さをしているのか・・・』

『人を殺しているそうだな』

『やはり知っていたのか・・・』

『ここは現世に近い。見えることは沢山ある』

『ならば教えてくれ、どうしてお前の体は女の首ばかりを狩る？』
尋ねると、大蛇は悲しそうな顔で首を横に振った。

『あれの体は私の物だが、中に潜む常闇のモノの意志まではわからない』

『どんなことでも良い、他に何かわかることはないか？』

『・・・一つだけ言えるとするならば、あれはまだ私の半身である』

と言うことくらいだ。道は切られても、常闇のモノに乗っ取られても、あの体は私の物だ』

『どういう意味だ？』

『さてな。言っている私自身よく分からない。ただ、言わねばならぬような気がして言っただけだ』

『そう言う曖昧な言葉で濁すところ、相変わらずだな』

『君も相変わらずだね、九狼。相変わらず不器用で、相変わらず他人に甘い』

『俺のことも観察してたのかよ』

『することもなくてね』

大蛇の笑顔に、鬼人は思わず苦笑を浮かべた。

『そろそろ時間だ九狼。これ以上いるとお前の体も取られるぞ』

『たしかに長居しすぎたよ。お前の側だからと思って安心しすぎた・

・・』

『なあ、九狼？』

現世へと戻ろうとする鬼人の手を、大蛇がとっさに掴んだ。

『私の体、止めてはくれないだろうか？私のただけでなく、密のためにも』

そうつぶやく大蛇の瞳は哀しげに揺らいでいた。

『私が不甲斐ないばかりに、あの子には心配ばかりかけてしまった。親としてできることはもう無いが、せめてこれ以上、あの子を苦しめたくはない』

『わかってる。俺が何とかしてみよう』

『私はいつもここにいるから。何かあったらまた来ると良い』

『そうだな、これが一段落して新しい仕事が入ったあかつきには、お前に常闇での仕事を手伝って貰おう』

『わかった、心して待っている』

大蛇の言葉に満足し、鬼人はその場を後にした。

大蛇から放たれた光が徐々に消え、鬼人の視界が暗闇で染まる。
『いったか』

残された大蛇は、少し寂しげに言った。だがふと、彼はあることに気づき鬼人の消えた闇を見つめる。

『持って行きおったか……。憎い奴め』

暗闇の中、大蛇の光だけが揺らめいていた。

其の参

「お前らどうしてくれるんだ！先ほどから全く動かないではないか！」

牢屋の中で横たわっている鬼人の横で、三人男と一人の老人が立っていた。

「これが天帝に知れたらどうなると思うておる！」

老人は叫び、手にした杖で男三人を順々に殴り倒している。

「彼がかの誉れ高き九狼殿とわかっていれば、こんな寒い牢などには入れなかったのに」

どうやら、老人は鬼人が死んだものと思っているらしかった。

「こうなればわしが腹を切って償わねば……。お主ら、介錯をするのだ！」

さらにわめき立てる老人と、困惑する男達。

そんな彼らの横で、鬼人がゆっくりと目を開けた。何とか体を起こし、鬼人はこわばった体をほぐしていく。昨日ほどではないが、やはり常闇がえりの体は重い。

「お？おおおおお！」

老人が、鬼人をみて絶句した。

鬼人も、自分を見て叫んでいる老人にギョツとする。

「なっ、何なんだよこれは……」

「生きておられた！九狼殿が生きておられた！」

「はあ？」

「私です九狼殿。警察隊の総帥『綾小路 縁』です」
あやのこうじえにし

老人の名前に、鬼人は必死に記憶の糸をたぐり寄せた。遠い昔、会った記憶がないことはない。

「ああ、覚えてるような無いような」

「九狼殿、このたびの不祥事は誠に申し訳ございませんでした」

鬼人のあやふやな回答を無視し、綾小路は地面に頭をこすりつけ

る。

「なにとぞ、なにとぞお許し下され!」

警察隊の総帥にこうまでされて、鬼人はどう反応したら良いかわからない。確かに昔はそれなりに名の知れた呪術師であったが、今はただの一般市民。こんな事をされる方がよっぽど後味が悪い。

「別に怒っちゃいない。早くここを出してくれるなら、別に何も言わないさ」

「天帝にこの事を言いつけたりなどしませぬか?」

「天帝とはもう赤の他人だ。あんた達が思うようなことは何も起きない」

「さようですか、その言葉で安心しました」

「だから早くここを出してくれないか? 急ぎの用があるんだ」

「ならば馬車を出しましょう。せめてもの償いに、どうぞお使い下され」

「いや、別にそこまでしなくても」

「いやいやいやいや、どうぞどうぞどうぞ」

鬼人の腕を取り、綾小路は無理に引っ張った。

鬼人は馬車が大の苦手なのだが、この老人には何を言っても無駄だろう。なので仕方なく、彼は腕を引かれるままトボトボと歩いた。

其の壱

時は鬼人が牢屋を出るより少し前、楚良達は疾風の探偵事務所へとやってきた。

疾風は元々金持ちのお嬢様で、この事務所も親の出資で建てたものだった。疾風にとって探偵と言う仕事は、金儲けのためではなく趣味の一環なのである。

「あれ、楚良じゃないか？」

事務所に入ると、疾風はたくさん書物に埋もれるようにして彼らを招き入れた。

「何してるんですか疾風さん？」

「いやね、僕なりにこの事件を調べてみようと思ってさ。色々と資料を出してみたんだよ」

言いながら何気なく楚良達の方を見た疾風は、彼らの後ろに立つクロウを見つけた。

「それで、その派手頭のおにーさんは誰だい？」

「派手頭ってオレのことかよ」

ムツとしたクロウの変わりに、楚良が彼のことを説明する。

「ふうん。それじゃあ、クロウは鬼人君のことではなかったのか」

「全く、疾風さんの調査って曖昧なんですネ」

「猿も木から落ちるって言うだろ」

どこか得意げにそう言う疾風を、クロウが蔑むような目で見た。

「こんな奴が探偵ならオレだってできそうだな」

「それはどういう意味だね君？」

「言葉通りの意味だよ」

「ふふん。ずいぶんと大きな口叩くじゃないか？脳みそまで筋肉化してそうな割にねえ」

「何だこの野郎？」

「僕は野郎ではない。歴とした女だよ」

「女なら女らしい格好しろよブス」

「僕がブスなら君なんてゴリラだろ。この筋肉鎧めが」

疾風が言うと、クロウの瞳に殺気が浮かんた。

クロウの殺気に気づかぬ疾風は良いが、横で見ている楚良と密はいつクロウが腰の刀を抜くのではないかと気が気ではない。

「けっ、喧嘩は良くないよ」

「僕としたことがこんな子供に諭されるなんてな……。バカと一緒にいるとバカが移ると言うのは、あながち嘘でもないらしい」

「何だと!」

「やめてよクロウも!」

鬼人とは違い、クロウは少々子供っぽい男だった。鬼人ならさりとかわす疾風の皮肉を、彼は真っ向から受けてしまっている。これでは喧嘩になるのもおかしくはない。

「僕たち疾風に助言を聞くために来たんだ。疾風もたまには静かに僕たちの話を聞いてよ」

楚良の言葉で辺りはようやく静かになった。そしてこの期を逃すなど、楚良は疾風と別れた後のことを事細かに語り出す。

「なるほどね、やはり大蛇が……」

「やはり?」

「僕もそう思って色々調べてたのさ。ちょっと違う方向からね」
言って、疾風は側に転がっていた古い書物を手に取る。

「僕が気になったのは、何故女の首ばかりを狩るかという理由だ。鬼人君が大蛇の死を調べるなら、僕はこちらを調べようと思った」

疾風らしからぬ真面目な言葉に、楚良は少しの間呆然としていた。
「そっ、それで何かわかったんですか?」

「それがどうにも上手いかなのだよ。着眼点は最高だと思うのにねえ」

「ほくら、やっぱり役に立たないじゃないか」

「五月蠅いぞ、クロウ」

疾風は言って、持っていた書物を投げ出した。それを、楚良が何

気なく拾った。

「イタチの生態系・・・、って何ですかこれ？」

「とりあえず僕は、イタチがどうやってカマイタチを発生させるのかを調べたんだ。でも良くわからなくてねえ」

「そりゃそうですよ。イタチだからって誰でもカマイタチを放てる訳じゃないんですから」

「何・・・！」

「呪術は血で遺伝するんです。日頃の鍛錬と生まれ持った才能がなければ、カマイタチはおろか簡単な呪術すら使えない」

楚良の説明に疾風が絶句した。楚良の話したことは一般常識であったが、疾風は本当に知らなかったようだ。

「うむ、となるとこの資料じゃいかなあ。えーっと、あれはどこへやったかなあ？」

汚い部屋をさらに汚く荒らしながら、疾風は書物の海をかき分けていく。疾風の性格だ、きっと調べものをしてないときでも事務所はこんなものなのだろう。

「あ、あったあった」

薄汚い巻物を取り出して、疾風は満足げに笑う。

「今度は何ですか？」

「呪術大全集」

カマイタチのことが書かれた欄を目で探し、疾風は素早くそこを読んだ。

「カマイタチとは、精神の力で目に見えぬ刃を作り出す術である。使いこなすにはたくさんの時間を要するが、刃を生み出すこと自体は大して難しくない。これは極度の感情の変動、例えば怒りや悲しみと言った物が、カマイタチを生み出す元となる『精神の力』を呪術に変換する引き金となるからである」

一番重要そうな所を読み上げ、疾風はしばし黙り込んだ。しかし黙り込む疾風の表情から、彼女が確かな何かをつかみ取った事が伺える。

「わかったぞ諸君」

「本当ですか？」

楚良が喜々として言った。

「きつと、大蛇は何かに怒っていたのだ。だから次々と人を殺したに違いない」

疾風の言葉には自信が満ちていた。だから楚良もなるほど思ったが、クロウはどこかいぶかしげな表情をしている。

「ちよつと待てよ名探偵。あんたの言ってる事、それは外れちゃいないが当たりでもないぜ」

「なにだと・・・？」

「怒って人を殺すなんて当たり前の事じゃねえか。本当に大事なのは、大蛇が何に怒っているかだろ？」

「そうは言うがねクロウ君。今の大蛇は首ばかりを狩るという猟奇殺人犯だ、意味もない怒りに捕らわれているって事もあり得ないかい？」

「たしかに疾風の言うとおりだよ、クロウ」

との声は、開け放たれた事務所の戸口の方からした。

「みんな待たせたな、鬼人大先生を連れてきたぜ」

戸口から入ってきたのは銀寺と、彼に支えられてようやく立っている鬼人。

「どうしたんですか先生、顔色が優れませんよ？」

「馬車でここまで来たんだが、鬼人は極度の乗り物酔いでな」

「うるさい・・・」

「疾風さん、水をこいつにやってくれるか？」

「はいはい」

疾風は素早くコップに水を注ぎ、フラフラしている鬼人に手渡した。鬼人はそれを受け取ると一気に飲み干し、まだむかつく胸を手でさすった。吐き気は収まったようだがまだ顔色は悪い。

「だから馬車は嫌いなんだ・・・」

「相変わらずだな、兄貴」

「おまえ・・・」

自分の前に立つ双子の弟を、鬼人は憎々しげに見つめた。彼の所為で牢屋に入れられたことを、鬼人はまだ怒っているのだろう。

「数年ぶりの再会だぜ。もっと仲良くやろう」

「俺は一生会いたくなかった」

「またまた可愛くないなあ。本当はオレに会いたくて仕方なかったんだろ？」

険悪な鬼人に対して、クロウは楽しげに言い放った。

「にしてもクロウ、何で都に戻ってきた？」

「オレが犯人されてるって話を聞いたからさ。最近は楽しいことがあまり無くてね、久々にゾクゾクすることに会えるかと期待したのさ」

「おまえらしい・・・」

ようやく笑みを浮かべ、鬼人はクロウの姿をまじまじと見た。彼も少しは再会を喜んでいるのだろうか。

「さて、おまえとのお喋りはここまでだ。密、おまえの知りたかった親父さんの死の理由、調べが付いたぞ」

「本当？」

密が目を見開いた。

「大蛇は死んだんじゃない。常闇のモノに取って代わられたんだ」

「どういう事？」

「大蛇は自らが新たな流山の主になるべく常闇へと降りた。しかしそこで体へと戻る道を絶たれ、大蛇の変わりに常闇のモノが大蛇の体へと入った」

「じゃあ父様は・・・」

「死んではいない。でも、生きてもない」

密が押し黙った。泣いてはいないが、動揺しているのは明らかだった。

「そして、この事件の犯人もやはり大蛇だろう。正確に言えば、大蛇の体と常闇のモノだ」

「じゃあ父様の体は止められないの？このままずっと人を殺し続けるの？」

「いや、それは俺が止める。絶対に」

密の問いに、鬼人はきっぱりと答えた。

「でも仕事は終わった・・・。なのに付き合ってくれるのか」

「あんたの親父さんと約束したんだ。これ以上おまえの息子を苦しませないってな」

密が小さく頷いた。

「お願い、父様を止めて」

「ああ。だが問題は太蛇がどこにいるかだ。神出鬼没の殺人犯をこの広い都で見つけるのは容易くない」

鬼人の言葉に、密が何かを思いつく。

「父様のお墓に行こう。そこで待ってれば、きっといつかは帰ってくる気がする」

「たしかに！」

と言ったのは楚良。彼は密の提案に乗る気らしい。

「行きましようよ先生。密のためにも」

「ああ・・・」

鬼人は少しの間何かを考え込んでいたが、楚良の言葉に促され、首を縦に振る。どうやら決意は決まったらしい。

「銀寺、おまえはこの事件を見届けるためにも俺達と来い」

「もちろんそのつもりだ」

「クロウも来い。何かあったとき、おまえが必要になるかもしれない」

鬼人に言われ、クロウは頷いた。

「なんだかゾクゾクするねえ。久しぶりに暴れられるかもな」

鬼人とは違い、やはりクロウは武者だ。そしてそんなクロウに、密が不安げな視線を向けていた。

「大丈夫、あれはあれで良い奴だから」

鬼人が、密の頭を軽く撫でた。

其の式

大蛇の墓がある頂上付近まで来たとき、既に時刻は夜中を過ぎていた。

墓は切り立った崖のすぐ側にあった。強い風が吹き抜ける場所で、足場は広いが気を許せば下に落ちてしまうような錯覚を感じさせる場所であった。

「ここか？」

「うん、あの右のお墓がそう」

吹きすさぶ風 に 体を取られぬよう注意しながら、鬼人は二つ並んで立つ墓石の右へ、ゆっくりと近づいた。

墓石が少し傾き、側の土が不自然に盛り上がっていた。きっと、埋められた後に常闇のモノは覚醒したのであろう。

鬼人が、今一步墓に近づいた。異臭がした。

さらに近づく、盛り上がった土から人の髪の様なものが見えている。

その時風がやんだ。

「銀寺、仏さんの頭はこらしいぞ」

銀寺が動いた。鬼人の隣にかがみ込み、少しばかり土を掘り起こした。人の頭が徐々にその輪郭を現し始めた。

「ここに埋めていたのか・・・」

「何故だろう鬼人？何故大蛇は頭ばかり・・・」

「大蛇に入った常闇のモノの趣味かもな」

吐き捨てるように言って、鬼人は阿辺りをうかがった。少し後ろには楚良や密、そしてクロウと彼の背負われた疾風がいる。

唐突に、やんでいた風の音が大きくなった。

耳がおかしくなったように、木々や岩場を吹き抜ける風の音が響き続けた。だがそれは唐突にやんだ。吹き始めた時と同じように、終わるのもまた唐突だった。

鬼人は身構え、視界を走らせた。
いた。

少し離れた大きな岩の上に、それはいた。
野犬ほどの大きさで、目は爛々と輝いている。だが本来は白いはずの毛並みは黒い闇に染まり、吐く息さえも黒く濁っていた。

鬼人は少しばかりの恐怖を覚えた。常闇によく降りるとは言え、闇に捕らわれた者を見るには初めてだった。

「大蛇が来る！銀寺、刀を貸せ」

鬼人が言った。同時に大蛇が鬼人へと飛びかかった。

寸前で避け、鬼人は半ば奪うように銀寺から刀を得た。引き抜き、それに言霊を込める。

『我 振るう 常闇の刃』

鬼人の刀に、大蛇と同質の闇がまとわりついた。

大蛇が鬼人と間合いを開け、吼える。

「兄貴、化け物はオレが殺る！」

唐突に、クロウが大蛇へと駆け出した。既に刀を抜いていたクロウは、それを人並みならぬ速さで難いだ。

刃は大蛇には届いていない。けれど、彼の放ったもう一つの刃は大蛇の体へと吸い込まれていった。

大蛇の前足が一本飛んだ。

「どうだ、オレ様のカマイタチの味は？」

残忍な笑みを浮かべるクロウに、大蛇はうなり声を上げる。そして三本の足で岩の上を駆けると、クロウと同様のカマイタチを大蛇もまた放つ。

鬼人が動いた。彼はクロウの前に立つと、素早く腕を高く掲げる。
『拒絶！』

鬼人の言霊に、見えない刃は弾かれた。気が付けば、鬼人の髪がクロウと同じ白に変わっていた。

「久しぶりに見たぜ、兄貴の白い髪……。だけどあんた、何でそれを普段は隠すんだ？いくら髪や瞳の色を隠したって、兄貴が兄貴

であることには変わりないんだぜ」

「派手なおまえと違って、俺は地味なのが好きなんだ。理由なんてそれだけで充分だろ！」

大蛇が間合いを取っている間、二人は軽く笑い合う。こういう時の鬼人は、クロウと同じく獣のような目をしている。やはり血筋は争えないと言うことか。

「行くぞクロウ。あいつは、もはやただの化け物だ」

「化け物であろうと無かろうと、オレは強い奴を斬るのが趣味なんだよ！」

クロウが駆け出した。鬼人がその反対側から回り込むようにして大蛇に近づく。

大蛇はクロウの刀を避けようとして跳んだ。しかしその腹には刃が叩き込まれた。

「兄貴！」

さあ斬れ！と、クロウが刀を掲げる鬼人に微笑む。

しかし刀を振り下ろそうとした矢先、鬼人の顔に不可思議な表情が浮かんだ。彼は何かに躊躇ったのだ。

大蛇が再び跳んだ。そして同時にカマイタチを放った。

「くそっ・・・」

鬼人が思わず立ち止まった。急いで言霊を紡ごうとするが時既に遅く、大蛇のカマイタチは鬼人の体の中へと吸い込まれていった。鬼人の肩口から、突然大量の血が噴き出した。

体を切断されることだけは免れたが、大蛇のカマイタチは鋭すぎた。

「兄貴・・・」

クロウが倒れ駆けた鬼人の体を支えた。鬼人は肩口から胸にかけて、深い傷を負っていた。

「待ってる兄貴、あいつはオレが仕留めてやる」

駆け寄ってきた楚良に鬼人を預け、クロウは怒りの籠もった瞳で大蛇を見据える。

そんなクロウは、まるで鬼の武者だった。

その表情に浮かぶ憎しみは深く、風に靡白い髪は人を不安にさせ、鋭く光る瞳には殺意が浮かんでいる。

楚良が、鬼人を支えながら思わず息を呑んだ。クロウが恐ろしかっただけではない。このクロウの兄である鬼人にも、鬼の武者が住んでいるのではないかと思うと、恐ろしくてたまらなかったのだ。

「楚良・・・」

恐れを抱く楚良を、鬼人が見つめる。鬼人の楚良を見つめる瞳は、クロウと同じく紅く鋭かった。

「先生・・・」

「これが俺だよ」

その言葉に、楚良が身をすくませる。

鬼人が無理に起きあがった。そして、今まさに刀を振り下ろさんとするクロウの前に立ちふさがる。

「やめろクロウ・・・。刀を・・・おろせ」

クロウは鬼人の正気を疑った。

「何言ってる！」

「良いから刀をおろせ！」

兄に怒鳴られ、クロウは思わず刀をおろす。鬼人の顔は楚良が恐れる鬼その物で、さすがのクロウもあがなえなかったのだ。

「先生！」

楚良が、再び鬼人に駆け寄った。

「楚良、すまないがそうやって体を支えていてくれ」

楚良の恐怖心は痛いほど伝わってきたが、そう言わずにはいられなかった。それほど、鬼人の傷は深かった。

「はい」

楚良が鬼人を支えると同時に、彼の傷口を押さえた。出血はひどかったが、鬼人は躊躇わずに一步を踏み出した。

大蛇が牙を剥き、鬼人に向かって威嚇した。

「静まれ大蛇、俺はもう刀は握らない」

大蛇はまだ牙を剥いていた。だが刀を捨て、血まみれになりなが

らも必死で立っている鬼人に、大蛇は何かを感じたようであった。
「おまえを斬ろうとしたとき、おまえの体の中に眠る意志と、口にするのできなかった言葉を聞いた」

大蛇のうなり声がやんだ。

「あんたは常闇のモノだが、まだ大蛇なのだな……。まだ、密の父なのだな……」

そこまで言って、鬼人の体からがっくりと力が受けた。楚良が慌てて支えるが、今の彼にこれ以上立ち続けることは無理だった。

「俺にはすべてが見えた……。だからもう、人を殺さなくても良い」

大蛇もまた、クロウに斬られた傷のせいで、立つこともままならなくなっていた。しかし、鬼人の話に必死で耳を傾けているのは明らかだった。

「常闇に心を取られてさぞ悲しかったな……。他人に体を支配され、さぞ苦しかっただろうな……」

大蛇が、悲しそうに一声鳴いた。

「父様……」

密が鬼人の横を駆け抜け、大蛇の体へと駆け寄った。

「父様！」

大蛇の体にはもう闇の気配はない。変わりに、息子と同じ白く美しい毛が今は風に靡いている。

「鬼人、父様が死んじゃうよ……」

密が泣いた。けれど、鬼人にもそれは止められない。

「おまえの父はもうこの世にはいない……。それは、おまえが一番よく知っているだろう？」

「でも……」

「そして、おまえもそれを望んだんだ……」

鬼人はそう言うのと、瞼をゆっくりと閉じた。

「先生！先生……」

楚良が鬼人の胸に耳を押し当てた。彼はまだ生きている、しかし

胸の鼓動は早くない。

「・・・僕の家運ぼう。鬼人まで、死んじゃいけない」
密が大蛇の体から離れた。

クロウが彼を担ぎ、密の背中を見つめる。

「もう、誰も殺しちやいけないんだ・・・」

泣きながら、密は自分の家へと続く道を駆け出した。

それに皆が続き、残されたのは動かなくなった大蛇の体だけであつた。

風が吹いた。

それは、大蛇の体から最後の闇を吹き飛ばしていった・・・。

其の壱

「先生！」

鬼人が始めに聞いたのは、彼を呼ぶ楚良の声であった。

その声でようやく、彼は自分が生きているのだと知る。さすがの彼も、今回ばかりは死というものを覚悟していたに違いない。

辺りをぼやけた眼で見回すと、クロウや疾風、銀寺の姿があった。遠くから、密も彼を静かに見つめていた。

「さすがの鬼人君もこれまでかと思ったよ」

疾風が彼女らしい言葉を口にした。

「うるさい・・・」

それに鬼人が応えた。

そして再び、鬼人はしばしの眠りについた。

鬼人が再び目を覚ましたのはその日の昼。体を布団から出したのは、それから少しばかり後のことであった。

気が付けばなじみのない黒い浴衣に袖を通していた。たぶん、血で濡れた服は洗濯でもされているのだろう。

鬼人は傷が痛むのを承知で部屋を出て、縁側をゆっくりとした足取りで歩いた。爽やかな風と暖かな日差しが心地よい午後である。

「鬼人？」

ボンヤリと外を眺めていると、奥の部屋から密が顔を出した。

「起きて良いの？」

「良くはないが、寝ているだけってのもな」

鬼人の笑みに、密が小さく笑う。

「少し、話でもしないか？」

鬼人が言った。密がゆっくりと、しかし大きく頷いた。

「さて」

縁側に腰を下ろし、鬼人はキセルに火を点じた。傷には良くないと思うが、鬼人は枕元に置かれていたそれを持ってきた。

「俺も話したいことがあるが、密も俺に言いたいことがあるんじゃないのか？」

「・・・うん」

消え入りそうなほど小さな声だった。

「鬼人は、もう全部知ってるんだね」

「言霊師は耳が良いからな・・・でも始めは、俺もお前の涙と言葉に騙されていたよ」

鬼人がキセルの煙を吐き出す。密が、それを眺めながら決心を固めた。

「確かに僕、みんなに嘘を付いていた。でも、あの時はそれしかできなかった・・・」

鬼人が空を見上げながら、再び煙を吐き出した。

「父様が人を殺してたんじゃない。僕が殺させていたんだ・・・」

「ああ」

鬼人が視線を空から密かに移す。

「それだけじゃない。・・・僕も一人、女の人を殺した」

そうして、密は自分の中の秘密と事件の真相を語り出した。

其の式

密が都に出た本当の理由。それは、父の死の理由を知るためではなく、新しい母を捜すためだったという。

家の使用人達は優しくかったが、母に続いて父を失い、密は寂しくて仕方がなかった。

だから、幼い彼は必死に考え、そして一つの答えに行き着いたのだ。

「母様が欲しかった。人でも物の怪でもいい、優しくて温かい人が欲しかった」

そうして、密は一人都へと出た。

都では、意外に早くい人に会えた。

彼女は人間でまだ若かったが、密が一人で見るところを見て可哀想に思ったのだろう。家へと連れて帰り、彼を四日ほど預かったという。

「だけど、その人は物の怪が大嫌いだった。それで・・・」

ある晩、密はちよつとしたはずみで化身の術を解いてしまった。

それを見た女はひどく仰天し、彼を慌てて家から追い出そうとした。今まで優しくかった人の突然の変貌に、密は何がなんだかわからなかった。でもただただ悲しくて、彼は大声で泣き叫んだ。そしてそれがいけなかった。

「気が付いたら、彼女の首が飛んでいた。自分がやったって事は何気なくわかった・・・」

彼にも父と同じ血が流れている。それゆえ、彼の悲しみがカマイタチを作り出したのだろう。

女の家は赤い血で染まり、密は恐ろしさにすくみ上がった。

そんなとき彼は見たのだ、いつの間にか家の中にいて、自分を見つめる大蛇の姿を・・・。

「最初は怖かった。でも、気が付いたら父様の体にしがみついていた

た」

恐怖に震える息子の姿に、大蛇の体が自然と反応したのだろう。

大蛇は女の首をくわえると、素早くその場から駆け出した。たぶん、息子の罪を被さる気だったに違いない。

「でも、父様が父様だったのはその時だけだった・・・」

その後、密はフラフラと都を歩き回った。

そして歩きながら、彼は思わず泣いてしまった。

「また人を殺してしまうかと思った。けど涙を流したり母様の名を呼ぶたび、僕の変わりに父様のカマイタチが現れた」

大蛇は密の涙を見るたびに、彼の側で人の首を狩ったのだ。

其の参

そこまで聞いて、鬼人はキセルを口から放した。

「でも、なぜ泣くと現れるのか、女の人の首ばかりを狩るのかはわからなかった。・・・でも、ただただそれを止めさせたくて、疾風さんの事務所へ行った」

「それで、大蛇が大蛇じゃなくなった理由を探そうと思いついたのか？」

「うん。・・・でも正直少し怖かったし、鬼人と会ってからにはビクしてばかりだった」

「自分の罪が暴かれるのではないかと思ってか？」

密が素直に頷いた。

そしてそれに合わせて、鬼人がゆっくりと口を開く。

「これは推理だが、大蛇はきっと密のことをずっと見守っていたんだと思う。心は違うモノとなっても、やはり大蛇は大蛇だった。・・・けれど、息子の変わりに殺しの罪を背負おうとしたとき、大蛇の中の常闇のモノの存在が大きくなってしまった。たぶん、死を間近で見た時、常闇のモノの悪意が強く反応したのだろう」

「そして父様じゃなくなった」

「正確に言えば、大蛇の最後の理性と常闇のモノの殺意が一緒になった。だから密が涙を見せるたびに、大蛇は首を狩るようになったのだと思う。女ばかりを狙うのも、常闇のモノが体を乗っ取ったきっかけが、女の首だったからだ」

「やっぱり、僕の所為だ・・・」

「そうだな。それは否定出来ない」

密の瞳に涙がたまった。けれど密は、それを必死に食い止めようとする。

「僕は弱くて泣き虫だった。だから父様は・・・」

「たしかにお前の言うとおりで。しかし、父親ならば誰だってそうしたんじゃないかな？」

「え？」

「俺には親がないから良くはわからない。でも、今までたくさん家族を見てきたから少しはわかる。母親や父親ってのは、子供のためなら命だって投げ出す強い生き物だ。だからこそ時として、悪しき道にも足を踏み入れる」

鬼人は言って、頭を手で搔いた。

「俺もな、昔父親になろうと心に決めたことがあったんだ。結局それは叶わなかったけど、色々とわかったこともある」

「鬼人さんも誰かの父様になりたかったの？」

「昔の話だ。まだ俺も若かったしな・・・」

「今だって充分若いじゃない」

「見かけはな」

笑って、鬼人はゆっくりと立ち上がる。

「お前もいつかは大きくなって、誰かの父様になるんだぞ」

「無理だ。だって僕は人殺しだ・・・」

「確かにそれは拭いようのない真実。けれど、罪を償うことはできる」

その言葉に、密の目が見開かれた。

「どうすればいい？ どうすれば罪を償える？」

密かに尋ねられ、鬼人は神妙な面持ちで考え込んだ。

「まず一番大事なのは、生きるって事じゃないかな？ 犯した罪の分だけ生きて、誰かの為に尽くす」

そう言った後、鬼人はふと自分の右手を見た。

「そしてもう一つ。これはお前にしかできない事だ・・・」

「何？」

「この山の主になれ、密。お前にならそれが出来る」

鬼人の微笑みに、密は困ったように笑った。

「無理だ。主だった母様は死んでしまった」

「けれど、主の力はここにあるんだ」

「どこに？」

「ここだよ」

言って、鬼人は自分の胸に手を当てた。

「常闇でお前に父にあったとき、ちよいとばかり盗んだんだ」

「常闇で・・・、父様にあったの？」

「ああ」

頷く鬼人の胸に、密がそっと手を当てた。そこに眠る力を――母から父へ受け継がれ、そしてこれから自分に受け継がれるであろう力を――探すかのように。

「暖かい。凄く・・・」

「けれど、所持する者には苦しい力でもある。山の聖脈を感じることでできる分、山の感覚と自分の感覚が同調してしまうから・・・」だから自分には重すぎる、と鬼人は苦笑した。

「僕にできるかな・・・」

「俺なんかよりは、よっぽど向いてるよ」

「本当にそう思う？」

「思ったからこそ、大蛇から盗んできたんだ」

鬼人が笑った。その笑顔に、密の面構えが変わった。彼の中で、何かが変化したようだった。

「僕、この山の主になる・・・。母様よりも立派な主に」

密が微笑んだ。

「では、目を閉じて」

自分の胸に添えられた密の手を包み込み、鬼人もまた目を閉じる。自分の中にある熱く大きな力の流れを、鬼人は自分の体からゆっくりと切り離す。それは少しばかり苦痛を伴うものであったが、鬼人はそれに耐えた。

『聖脈よ力を取り戻せ 命に近き力の流れよ 正しき物へと移り変われ』

力を言霊に乗せ、鬼人はそれを密の中へと送り込んだ。

小さな喪失感と、心地よい風が吹き抜けるような爽快感をとま
つて、力は鬼人から密へと渡った。

「どうだ・・・」

密から手を放し、鬼人はため息をつく。

「いろんな言葉が聞こえる。今まで聞いたこともない音も聞こえる」

「耳の良い言霊師でもない限り、その音や言葉になれるのは時間がかかるだろう」

「聞こえるだけじゃない、今まで見えてなかったものが見えるよ・・・」

「聖脈の流れや、常闇のモノ。人が精霊と呼ぶ者や、体を失った魂・・・。この世には、そう言うモノがあふれている」

「色々あり過ぎて目がちかちかする」

「これも慣れだな」

鬼人の言葉に、密がふと首をかしげる。

「鬼人は、今もそう言うモノが見える？」

「まあな」

そう言う鬼人の顔は少し悲しげだった。

「主じゃないのに？」

「主以外にも、特殊な目や耳を持った人はいる」

片耳を手でふさぎ、鬼人は何気なく目を細めた。彼もまた、人には見えぬモノを見、人には聞こえぬ音を聞きながら生きているのだろう。

「それは時として多くのものを与えてくれる。けれど失うものもまた多い」

「・・・」

「何が起きても恐れるな。強き目と耳にそぐわぬ、強き心を持って」
キセルをくわえ、鬼人は言った。

「それが、お前の償いだ」

其の四

『見ていたよ九狼。・・・良くやってくれたね』

常闇の中、大蛇はいつもの落ち着いた調子で鬼人を出迎えた。

『全部知っていたな。密の嘘も、自分の体のことも・・・』

大蛇はにっこり笑って頷いた。

『何故言わなかった』

『必要ないと思ったからだ。君ならすべてを見抜くと思っていたし、密のためにもこの方が良いと思った』

『・・・やはり息子のためか』

鬼人はため息を一つ付いた。密の事を思っているのなら仕方がないが、良いように利用されていたような気がしないでもなかった。『でもすまないと思っているのだよ。昔の友だという理由だけで、君にこんな事までさせてしまった』

『別にかまわないさ』

『良くはないよ、君は体に深い傷まで負った。その傷は常闇のモノが付けた傷、後は残るだろうし一生疼く』

『俺の心配より息子の心配をしたらどうだ？あの子の傷こそ一生物だ』

『傷・・・？』

『その気はなかったと言え、人を一人殺してしまったのは事実。そして、己の罪を隠すために俺達を欺き続け、嘘を重ねた。それは、心に強く響く』

鬼人の言葉に、大蛇がゆっくり目を閉じる。その顔が、悲観に歪んだ。

『しかしその傷は癒えてはならぬ物でもある。決して隠してもならぬ傷でもある』

大蛇の言葉が、鬼人の胸へと突き刺さった。密のことなのに、ま

るで自分にも当てはまるような気が、鬼人はした。

『確かにな・・・』

言うと、肩の傷が不意に疼いた。常闇のモノが負わせた傷だからだろう。魂だけの状態でも、鬼人の負った傷は疼くのだ。

『そんな苦しい顔をしておきながら、お前は私に心配するなど言うのか？』

『この傷は俺の不注意が招いたことだ』

『しかし・・・』

『本当に気にするな。・・・それに、家に帰って寝れば痛みも引くさ』

笑いながら、鬼人は常闇から現世へと、自分のあるべき場所へと帰っていった。

終章の壱

結局、この事件は全てを包み隠さず世間に公表された。密のことも、大蛇のことも。

それを密自身も望み、鬼人も彼の意志を止めることはしなかった。もちろん彼は幼いし情状酌量の余地もある。現在は釈放され、あの家出ガマ爺の元流山の主として修行中だ。

都の人々はこの事件を知り、心を痛めた。だがその感情も一時の物だと鬼人は言う。

日々の忙しさから、人々はいずれこの事件のことを忘れていくだろう。事件に関わった鬼人もまた、徐々にはっきりとした記憶を失っていくだろう。

でもそれでいいのだ。あまり強すぎる記憶は人の歩みを止めるだけ。記憶はいずれ失われ、あとにはぼんやりとした想い出が残る。その曖昧な想い出と傷の痛みさえ忘れさえしなければ、それでいいのだ・
・。

終章の式

「あれからもう一週間かあ」

有線放送の流れる喫茶店のカウンターで、楚良は頬杖をつきながら言った。

店に客はいない。鬼人を覗いてと言う意味だが。

「密元気かなあ」

「さあな」

素っ気ない鬼人に楚良が少しムツとした。

「気にならないんですか？」

「仕事が終われば赤の他人。大切なのは次に現れる依頼人だ」

「でも次の仕事、全然来ませんね」

「・・・・・・」

楚良が言うようにこの一週間、見事なまでに客足が遠のいていた。事件を解決に導いた張本人だというのに、世間は冷たいものである。

「まあ、いいか・・・」

「良くないですよ。ウチのツケどうするんですか！」

「お前の命を救ったって事でチャラにならないかな」

鬼人が何気なく言うと、カウンターの向こうで巴が軽く笑う。

「それとこれとは話が別」

巴の笑顔に鬼人がうめいた。

「お前、俺が髪結いをなくしたことをまだ怒ってるだろう」

「さあね」

巴がすまし顔で鬼人から顔を背けた。

鬼人は大蛇と対決したあの夜、巴からもらった髪結いを無くしていた。それに巴はご機嫌斜めのようなだが、実は鬼人自身も相当その事で落ち込んでいるのを楚良は知っている。だがそれを知りつつ、彼は何も言わずに二人のやりとりを見守っていた。偶には師匠の困った顔を見るのも良い物だと思っているに違いない。

そんなやり取りの中、ベルがカランと鳴り喫茶店の扉が開く。

「やあ鬼人君。ご機嫌麗しゅう」

疾風だった。ついでにクロウの姿もある。あからさまに鬼人が嫌な顔をした。

「兄貴、オレやっぱこの女の家になんかいたくねえよ！兄貴の長屋に泊めてくれよ！」

クロウが言った。どことなく顔が曇っていたが、鬼人は見て見ぬふりをする。

クロウはあれから、都に留まる事にしたらしい。しかし鬼人の長家は狭いので、大きな屋敷を所有している疾風の家へと転がり込んだのだ。・・・が、どうやらそれは間違いだったらしく、毎日こうして鬼人に泣きついていてる。

「自分で稼いで部屋を借りろ」

「何して稼げていうんだよ！」

「疾風の事務所でアシスタントでもしたらどうだ？」

「だからオレは、この女とは関わり合いになりたくないんだよ！」

クロウが嘆いた。いったい彼は、疾風に何をされているのだろうか。

「僕は名案だと思うよ。丁度アシスタントも欲しかったんだ」

「嫌だ、絶対嫌だ！」

「じゃあ屋敷から出て行ってくれ。金もない奴を長々と泊めるほど、僕は優しくはないのでね」

ニヤリと笑い、疾風は巴にいつもの三点セットを頼む。

対するクロウはぐうの音も出ず、店の真ん中に突っ立っている。

少しばかりこめかみが引きつっていたが、怒りを口にする気力はないようだった。

「仲良きことは美しきかな」

鬼人は言って、前に置かれたコーヒーを一口する。

いつもと同じ香りの、いつもと同じ味がした。

「そうだ先生」

のんびりとコーヒーをすすっている鬼人の顔を、楚良が真剣な眼差しで見つめた。

「先生って、本当は人間じゃないんですか？」

あまりに唐突な問いかけに、鬼人は思わずむせ返った。

「なっ、何でだよ！」

咳き込む鬼人の背中を、楚良がさする。

「だって鬼みたいに白い髪をしてるし……。術の使い方も尋常じゃないし……」

「そりゃあ、まあ」

「それに先生は天帝にも認められた呪術師なんですよ？それって凄すぎるじゃないですか」

楚良の言葉に、鬼人は唸った。どう返答したらよいかわからぬらしい。

「先生は鬼ですか？それもと物の怪ですか？」

「どちらでもない」

「じゃあやっぱり人間ですか？」

「さてな」

鬼人は惚けた。

「何で教えてくれないんですか！」

「お前だって教えたくないこの一つや二つあるだろう？」

「無いですよそんなの！」

とたんに、鬼人の目つきが厳しくなる。

「じゃあ、十二才まで『おねしょ』をしていたと言うことは秘密じゃないのか？」

鬼人の顔に笑みが浮かぶと同時に、楚良の顔が赤らんだ。

「楚良にそんな秘密があったなんて僕始めて知ったよ」

そう茶化すのは疾風。彼だけでなく巴やクロウも笑っている。

「先生、今僕の中から言葉を取り出したでしょ！」

「はて？何の事やら」

キセルを取り出しながら、鬼人はニヤリと笑ってみせる。その顔

は鬼でも物の怪でもなく、人の顔だった。

「先生なんて嫌いです」

楚良が言った。

「嫌いで結構」

鬼人が返した。

二人の間に沈黙が流れた。だが気まずい沈黙ではなかった。

喫茶店のドアが開いて、客がまた一人入ってきた。入り口の扉につけられた鈴が、いい音を響かせた。

「あの・・・」

入ってきたのは女性で、彼女は喫茶店の中をキョロキョロと見回す。その視線の動きに、鬼人がふと顔を上げる。

「言葉をお探しですか？」

鬼人が微笑むと、女が小さく頭を下げた。

「初めまして、言霊師の鬼人九狼です」

「と、その助手の楚良です」

楚良の言葉に、鬼人は無言で側にあった新聞紙を丸め始めた。

【終】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7219s/>

言霊師

2011年9月5日03時31分発行